

土製煮炊具にみる中世食文化の特質

Aspects of Food-Eating Culture in Medieval Japan from the Standpoint of Earthenware Cooking Vessels

鋤柄俊夫

- ①はじめに
- ②土製煮炊具の定量分析
- ③土製煮炊具の個体分析
- ④おわりに

【論文要旨】

中世の食文化を特徴づける鍋と釜は、一般に東日本の鍋、西日本の釜という地域性が指摘されている。しかし出土する土製煮炊具をみれば、中世前期の東日本では鍋がみられず、西日本でも釜が全てであったわけではない。出土する数は少ないが、主体はおそらく鉄製品だったのであろう。それではあらためて、各地でみられる中世の土製煮炊具は、中世社会においてどのような役割を果たしていたのだろうか。小論は、定量分析と使用痕跡の検討などにより、この問題を考えたものである。

その結果、定量分析からは、鉄鍋の産地であった河内をはじめとする各地で、中世を通じた土釜・土鍋の量と播鉢の量の連動が明かとなり、個体分析では、土釜・土鍋と鉄鍋の法量が基本的に対応する点、鏝の有無が機能に反映されない点、内面の残滓が古代と比べて少ない点、脚付き煮炊具が広い地域でみられる点などを抽出することができた。

これらはいずれも、鉄製品が存在してなお、土釜・土鍋が日常品として使われていたことを示すものと考えられ、具体的には、土製煮炊具は高価な鉄釜の代用品として、主に「茹でる」・「蒸す」などの「湯沸かし」に使われたと推測されるのである。

中世前期にみられる東国と西国の違いは、おそらくこの調理法に由来するものと思われ、さらに15世紀以降にみられる全国的な土鍋・土釜の出土は、それ以外の土器・陶磁器と、その生産構造まで巻き込んだ、汎日本的な食文化の変化に関わるものと考えられるのである。

さらにこのような主たる用途の共通性と別に、土鍋・土釜はそれぞれの形態的な特徴などにより、独自の地域性を形成していた。これは、食文化という点で、おそらく当時の生活の違いをもっとも反映した地域性と言いうことができるが、中世社会に対するその意義は、単に食文化にとどまらない可能性ももってきている。今後の課題とされよう。

①……………はじめに

考古学から中世の食を特徴つける資料は、播鉢と鍋・釜である。

これまで前者については大橋康二⁽¹⁾・荻野繁晴氏⁽²⁾らによる詳細な研究がおこなわれているが、後者については、分類研究などはおこなわれているものの、その実態については未だ十分な検討が加えられていない状況にある。

ところで周知のように、中世の煮炊具はその火処との関係において、大きく東西日本にその地域性を分けることができるとされている。すなわち東日本は囲炉裏に鍋、西日本は竈に釜という図式である。

確かに考古資料に現れたその状況は、基本的にその地域性と同様な傾向を示す部分が多い。しかし土製煮炊具についてみれば、内耳鍋が出現する以前の中世前期の東日本では、それがみられず、西日本においても、必ずしも釜が全てではなく、地域によって鍋が主体となった個別の特徴をもっている状況もみられるのである⁽³⁾。

東西日本を二分する地域性の問題については、その起源が旧石器時代まで遡りうることもよく知られているが、同じ列島の文化を構成する両地域において、食の根幹を異にしてしまう説明はやはり不自然であり、このままでは中世前期の東日本では、煮炊き料理は存在しなかったことになってしまう。

しかしこれはもちろん、土製品のみ視点がおかれていた見せかけの現象説明であり、この器種の基軸にあったのはおそらく、汎日本的に使われていた鉄製品であり、それは必ず再利用されるために、考古資料としてはみつけにくいだけと考えるべきであろう。

それではあらためて、このような実際の機能を果たしていた鉄製品に対して、各地で出土する中世の土製煮炊具は、どのような役割を果たしていたのであろうか。

そこで小稿では、このような特異な様相をみせる土鍋・土釜の意味と機能に視点をおくことによってその実態を考察し、中世食文化の一端に接近する中から、日本の中世社会を再考してみたいと考えるものである。

さて、そのために試みる分析の方法であるが、小稿で必要な作業は、これまでおこなわれてきているような、大枠で理解される編年的または地域論的な資料整理ではなく、当時の個々の実態にできるだけ近づいた、個別の事例の検討である。そのためここでは、それら個々の資料の機能を表現しうする方法として、定量的な分析をひとつの柱にしたいと考える。

ただし様々なケースでおこなわれているこの方法ではあるが、その数値の前提となる母集団の性格が、ある程度説明されていないと、そこで算出された結果は、抽象的な数字を示すにすぎないものとなる。

また特定の遺構に限った場合などは、集約されるデータの中から規則性を抽出することにより、あらためてその遺構の性格についても言及することが可能な場合もあるが、多様な遺構が共存する集落遺跡または都市遺跡を対象とした場合は、調査範囲と本来の村または都市などの位置との関係もあり、そこで示された数値が、どれほどその内部にある様々な個性を表現しているものかは、疑

問の場合が多くなって来る。

もともと、これまでおこなわれてきたこのような一般的な定量分析が、まったく意味の無いものである、というわけではない。それぞれは、各々が対象とした資料のもつ意味について、ある一定の傾向を示し、今後の検討材料として、重要な結果を提示する場合も少なくはない。また、定量分析の方法の違いにしたがい、各々の数値に前提条件を付与することにより、それが限定的ではあるが、生産的な議論を展開する基盤になる場合もある。

しかし小論で問題にしなければならないのは、土製煮炊具の普遍的な変遷や広義の地域性ではなく、より個人に密着したその使われ方、そして機能とその意味である。そのため、ここでおこなわれる定量分析には、できるだけ、土製煮炊具が使われていた最小の単位に近いデータが必要となってくることになる。

そこでここでは、最初に出土遺物の総重量を集計した日置荘遺跡を対象としながら、分析の単位を、家族に準じた屋地とし、その屋地単位の復原からはじめた定量分析を軸に、この問題に接近していくことにしたい。

②……………土製煮炊具の定量分析

日置荘遺跡

日置荘遺跡は、大阪府南河内郡美原町から堺市にかけて所在する、古代～近世の複合遺跡である。遺跡はその西半部から須恵器窯・埴輪窯が、中央部および東部からは奈良時代以降で特に中世を中心とした集落跡が検出されているが、このうち中央部以東の集落跡については、それらが奈良時代から近世まで連続して捉えられ、さらにこの地域が鎌倉時代を中心として全国に名を知られた「河内鑄物師」の本拠地であり、この遺跡もある時期において、その一端を担っていた可能性が高いなど、中世村落の復原対象として、条件の整った遺跡と考えることのできるものである。

その成果の一部については、既に概要報告などで広く供されているところであるが⁽⁴⁾、その後(その2)調査区(D～Jトレンチ)については、遺物・遺構の様々な属性が整理され、村落の構造を考えるために必要な、多様なデータも知られることとなっている⁽⁵⁾。

本章は、この要件において、日置荘遺跡(その2)調査区のデータを活用することにより、時代毎の屋地単位の復原からはじめて、そこで使われていた個々の土製煮炊具について、その意味と機能の一端を整理するものである。

①屋敷地配置の復原と変遷

既に報告されているように、日置荘遺跡の各地点で検出された遺物と遺構群は、いずれも中世を連綿と続いた村落がそこにあったことを示している。しかし発掘調査で記録される遺構の多くは、大方が16世紀中頃と推定される、これらの村落の最終的な景観であるため、これらの遺構を検討するだけでは、奈良時代にその起源をもつ日置荘村落本来の復原はできないことになる。本章にとって必要なデータは、日置荘遺跡に遺された各遺構の最終埋没時期ではなく、日置荘村落における時代毎の屋地の配置であり、そのために必要な作業は、中世後期の錯綜する村落景観の裏に隠された

図1 日置荘遺跡遺構配置図

13・14世紀およびそれ以前の状況を復原することなのである。

そこで発掘によって与えられたデータをあらためて検討すると、そこには、数次にわたり形状の変更を受けてきた様々な遺構と、その度に時代を超えて包含されてきた多量の遺物群のあることがわかる。基本的に遺構は、村落の改変の際に、一時期に形状の変更を受けるものであるが、重層的な村落の変遷を背景として、そこに含まれている遺物の焼成年代は、必ずしも短い時間幅におさまるものではなく、使用期間と2次的な廃棄の繰り返しによって、むしろ長期間にわたる年代の示される場合が多いものとなっている。

したがってこれらのデータに対し、そのまま遺構の時期に関する標準的な整理をおこなうと、そこで描かれるのは、もっとも新しい遺物によって年代の比定される、最後におこなわれた造成の状況だけであり、実際にはそれ以前の時代の資料も手にしながら、しかし、それらの時代の村落の様相については、なんら語ることもないまま復原を終えてしまうことになる。

しかしこのように、多くの遺物がたとえ時期の異なった混濁した状態で出土したとしても、河川・谷部など、明らかに広範囲におよぶ土砂の移動を余儀なくされる立地を除いては、それらは、最後に埋められた時代以前にあった、なんらかの遺構内の遺物が、度重なる景観の変更により、削平されたり整地層となった後に包含された結果なのであり、決して無意味な混入として済まして良いわけではないはずである。

それはむしろ必要な手続きを経ることにより、それぞれの時代において、そこがどのような遺跡であったのか、たとえば、どのような規模の屋地がどのように配置されていたのかを、ものがたる要素を内在していると考えべきものなのである。

そこでここでは、はじめにそれらの不可避的な移動距離を原則的に10m以下と仮定し、その10m(100m²)を単位とした方眼を基準として、包含層も含めた全ての遺物を取りあげ、そこから出土したあらゆる遺物の種類別・時期別(型式別)の分布図を作成することにした。

なお、精査の結果明かとなった資料の分類は、次の通りである。6～8世紀の須恵器・土師器、9・10世紀の土師器・須恵器、黒色土器碗、在地系土師器皿、京都型土師器皿、山茶碗、常滑窯系播鉢・甕、瀬戸窯系水注・手付き片口・折縁深皿・灰釉平碗・灰釉皿・鉄釉壺、中国製褐釉壺、瀬戸内東部系須恵器甕、中国製白磁四耳壺・青磁碗・青磁皿・青磁壺・白磁碗・白磁皿・鉄釉碗、東播系播鉢・甕、備前窯系甕・播鉢、土師器釜、瓦器釜・鍋・足釜・播鉢・甕・茶釜・火鉢・仏具、石臼、石鍋。

図5はこれらのうちで、13世紀代の瓦器碗、13世紀後半または14世紀前半の常滑窯甕および、15世紀代を中心とする瓦器火鉢についてその分布を示したものであるが、調査区の広い部分で面的にそれらの出土していることがわかる。しかしこの状態のままでは、ここで示された出土分布の範囲が、全て単一の屋地であったのか、あるいはその中にいくつかの屋地があって、それが連続した結果なのかは、明らかにすることができない。

そこでこの問題を解決するために、さらにこの作業に追加する形で、時期毎に種類別資料の定量的整理もおこなうこととした。対象とした資料は、碗・皿(黒色土器、瓦器)、釜(土師器・瓦器)、甕(東播系・瓦器・常滑窯・備前窯)、播鉢(瓦器・東播系・備前窯)である。中世を通じて無作為的な遺物の移動があったとしても、かつてあった任意の屋地の中心地が、遺物の量によって推定

図2 ドット分布図・重量分布図のグリッドと遺構の関係

される可能性を考えたのである。

基準とした計測の方法は、対象としている遺跡が消滅・廃棄を前提としている消費遺跡であり、遺物の多くが口縁部より体部の構成比の高い中・大型品であるため、口縁部計測法または破片数の計測ではなく、重量の集計を優先的なものとした。

計測した資料は（その2）調査区出土遺物の全てにおよんでいるが、分析の対象は、機能を一義とした前記の分類により、また時期区分については、細片など遺物の型式認定に情報の十分でない資料も多く、また遺物の型式分類に対して遺構がその細分に応えられない部分もあるため、11～16世紀の間で概ね1世紀をその単位とした。なお足釜については出土量が少ないため、ドット分布図をそのまま使用している。

このうち生活具として最も鋭敏な指標となる釜に代表させて、時期別重量の空間変移を図4に示した。ここで示されているグラフのピークは、10m方眼で集計した土釜の重量であるが、グラフによれば、そのピークは12世紀におけるIトレンチの優位から、13・14世紀においてD・Eトレンチへ、面積を広げながら移り変わっていくことがわかる。単純に考えれば、ここで示された土釜のピークは、かつてそれぞれの時代において、その使用者が生活していた中心に近い一角を意味するものと考えられ、したがってこのグラフは、遺構とは別の論理において、各時代における屋地の配置を示し、さらにそれぞれの単位における出土量の違いによって、その使われ方の程度も示しているものと考えられるのである。

図3 遺物と遺構の分布

図4 土釜の重量分布

さらにここでは、各時期をおおむね1世紀としているため、その量の差は、単位時間内に使われた(捨てられた)量の差を示すことにもなり、それは使用法が同じであれば、その差の原因を使用人数の差に求めることも可能ではないかと考える。

そこで次にこれらの資料を用いて、各時期における屋地の配置と規模を復原していきたい。ここでは10m方眼の時期別種別重量図を、土釜だけでなく、碗・皿(黒色土器、瓦器)、甕(東播系・瓦器・常滑窯・備前窯)、播鉢(瓦器・東播系・備前窯)についても作成し、それぞれのケースで出土重量がピークとなるポイント、あるいは集中をみせるゾーンを抽出し、それらを時期毎に重ね合わせた時に整理される単位を調整し、それらがもっとも当時の屋地単位に相応しいものであると推定することにした。

この作業のうち、12世紀以前と14世紀以降については、残存する遺構との関連で比較的容易に各屋地を復原できることがわかった。問題は13世紀代の状況にあった。出土遺物のピークポイントのレベルはいずれも低く、しかもそれらは集中的と言うよりも分散的であり、さらに屋地の区画を示すような遺構は、例えあったとしても後代の開発により不明となっているのである。

このような定量分布分離の曖昧な状況に対して、これまでおこなってきた遺物を中心とした普遍的かつ総括的な方法はあまり効果的ではないようである。そこでここではもっとも初歩的な方法として、たとえば各屋地にひとつずつしかないような遺構を、個別的にとりあげることを考えてみた。

その一例が、失われた遺構群のなかでも削平されにくい井戸である(図3)。そしてこれらの井戸に対し、14世紀以降の遺物を含まないか、あるいはより新しい時期の遺物が共に取り上げられている場合でも、量・器種構成・時代差などから、その中心が13世紀代と考えられる場合、といった条件を付与することにした。

13世紀代における屋地規模と範囲の復原は、これらの井戸の配置と、遺物重量にみられるピークポイントの関係による推定である。

以上の作業により復原されたのが図6である。時期はⅠ期(11世紀代)・Ⅱ期(12世紀)・Ⅲ期(13世紀)・Ⅳ期(14世紀)・Ⅴ期(15世紀)・Ⅵ期(16世紀前半)に区分される。

これらによると、11・12世紀の景観は基本的に変わらない。原則的に条里を単位とする形で集落が点在する。規模は1町程度であろう。

一方13世紀後半頃(Ⅲ期後半)には、それまでの集落規模が縮小する一方で、いくつかの屋地の集合する状況がみられる。規模は概ね1/6町であり、調査区内では12カ所推定される集落の内、7区画の集落が集合している。

14世紀代は、Eトレンチの北に溝で区画された1町規模の屋敷地がみられ、その南に1/6町規模の屋敷地がならび、和泉と大和を結ぶ東西道路に面して1/20町規模および1/8町規模程度の屋敷地が配置される。なお1町規模の屋敷は土塁をもっていた可能性がある。

核となる屋敷を中心としてまとまった、村落の形を復原することができる。このうち中心の屋敷地に南面する部分で、1/6町規模の屋敷地に東面する部分は空閑地であるが、さらにその東側には桜ヶ池(更ヶ池)という溜池のあったことが知られている。その築造時期については、発掘調査でも明らかにすることはできなかったが、空閑地の意味をここにおくことも可能ではないかと考える。

15世紀代においても基本的にこの状況は変わらない、ただし前代に核とされていた1町規模の屋

図5 土釜重量の空間変遷

図6 推定される集落の変遷

敷地は溝の西半部を埋めて規模を縮小し、一方Hトレンチには同規模に近い、新たな屋敷地ができる。中心屋敷地は縮小または分散するのである。

16世紀前半は、この状況が進展する形で中心的な屋敷地は失われ、遺物量分布の中心は近世より続く現在の村落の中心により近い、西方へ移動していく。

②屋地および屋敷単位の定量分析

これまで整理してきたように、(その2)調査区は、条里単位でみられた集落配置が13世紀後半には部分的な集合化をみせ、14世紀に入るとその地区を中心として階層の整った村落が形成される形で復原できる。しかもこの村落はその領域線上に溜池を配していたことも考えられ、それは、丹南地域における中世後期村落のひとつのモデルになると言えるものかもしれない。

さてそれでは、このように復原される村落の内部において、各々の屋地と屋敷地はどのような遺物の構成を示すことになるのであろうか。

そこで次には、最初に集計した10m方眼の時期別種別重量を、前項の考察によって復原された集落の単位毎に再集計し、それぞれで最少の個体数を算出することにした(表1)。

なお個体数計算の方法としては、最初に各器種の各型式を代表する資料を選択し、完形品の場合はその重量を、破片の場合は断面図からの体積計算をおこない、後者については、土器・陶器・磁器の代表的な比重から、対象とする全ての資料の標準的な個体重量を算出し、各器種の屋地毎に集計された、それぞれの資料の重量合計をその値で除すものとしている。

これらの作業により、集落毎に残されていた、土器・陶磁器に代表される家財道具の内容とその数が、最少の個体数に近い形で示されたことになった。

以下、このデータをもとに、日置荘村落の変遷と、そこで使われていた土器・陶磁器の量について、くわしくみていきたい。

A I期(11世紀代)

最初に11世紀代の状況を復原するわけであるが、その前段階はどのような状況だったのであろうか。

8世紀代をみれば、掘立柱建物群に代表される遺構の分布は、西側のK・Lトレンチに限定的に見える。しかし遺物の分布は必ずしも特定のなものではなく、A～Jトレンチでも奈良時代以前の遺物を含んだ細い溝などがみられる。またAトレンチでは、それ以前にさかのぼる時期の遺構も推定されており、この時期の中心をK・Lトレンチのみにおく必要は特にないものと言える。

さらにこの傾向を補うものとして、9世紀代に入り(その1)調査区(A～Cトレンチ)からは、石帯の出土を見ている。律令的規範を前提としたとき、K・Lトレンチと同時にこの時期の中心的な集落を(その1)調査区におくことも可能かもしれない。

このように、8～10世紀における、同時代的な空間的視点での集落の復原は、今回のデータ整理からは不明な部分が多い。しかし編年的整理の上では、8世紀の遺物量と9～11世紀の遺物量は、減少傾向で大きく異なる点に注意される。

例えば9・10世紀を特徴付ける底部糸切りの須恵器碗および瓶子の分布は、調査区全体を通じて

表1 集落別個体数の集計

散在的に見られ、詳細な時期の判定にはいたらないが、10～11世紀を特徴付ける黒色土器碗についても、同様な傾向が認められる。しかし一方で、それらの出土量が、8世紀代から大きく減少していることは明らかであり、この地域における条里村落の変遷が、決して均質ではなかった状況は、推測できるものとなっている。

そしてI期の集落は、定量的には基本的にこの延長上にあったようである。確認された出土遺物は、土師器皿と黒色土器であり、推定される3カ所の集落を合わせても、その数は十数点を数えるにすぎない。

一方集落をみると、調査区の西端に4000m²規模の単位1と2500m²規模の単位2が、東端に2500m²規模の単位3がみられる。単位1の集落は東西90mにわたって遺物の分布が認められるものであるが、調査区内においても、その北側では遺物がみられず、一方南はこの範囲を超えると条里地割を越えてしまうため、おおむねこの範囲が推定される。単位2の集落については、実際の調査範囲は狭いものであるが、出土量が多いため、独立した単位として推定した。出土遺物の最少個体数は、残りの良いものとして単位2の集落のデータを優先させているが、黒色土器碗と土師器皿はおよそ同じ比率を示すものとなっている。

B II期 (12世紀)

前代までの遺物の出土分布は、具体的な遺構の不明瞭さに関わらず、(その1～3)調査区全体に平均的な景観を示していた。しかしこの時期以降は、(その1・2)調査区(A～Jトレンチ)に限定的な出土データが示されることになる。

(その2)調査区でのあり方は、前代より続く条里単位に配置された集落の状況と言える。推定される集落の単位はいずれも同規模(4900m²)であり、配置は調査区をおよそ3分する形となっている。出土遺物の最少個体数は、土師器皿などでは2～24までばらつきがみられるため、もっとも残りの良い単位1の集落に代表させると、土師器皿は瓦器碗に対して約1.3倍、釜と播鉢は同じ比率、甕はそれに対してやや多い傾向を示していることがわかる。

C III期 (13世紀)

おそらく前半代はII期と同様な景観を描くことができるものと考えられるが、後半には(13世紀後半)条里を越える形で集落の集合が認められる。

推測される集落の単位は、規模において、Aグループ：1600m²(単位3～12)、Bグループ：2500m²(単位2)、Cグループ：3600m²(単位1)に分けられる。

最初に、集合したAグループをみれば、土師器皿については、平均を逸脱する単位3と単位6のデータを除き、その値は4～40を示し、その差は10倍となっている。

一方ここに示されている数値は、集落の範囲と無関係にトレンチ調査されて出土した遺物重量の生の集計値である。したがって本来の集落相互を比較する際には、未調査部分の残っている集落については、それが全敷地の何割にあたるかを考慮し、数値の補正をする必要がある。ただしその方法については、発掘された箇所がその集落のどのような機能を与えられた部分であったのか判断し、それに見あった補正を考えなければならない。

しかしながら、現状において集落内部の構造は解明されておらず、この作業が十分におこなわれるための条件を整えるにはいたってない。したがってここでは、全集落の面積と調査面積の比による単純補正を加味しながら、村落全体での屋地相互の状況により、その値に適宜補正を加えて考えていくことにしたい。

以上よりこれを換算すれば、土師器皿の最少個体数は、単位4の集落から順番に、 $40 \cdot 7 \cdot 7 \cdot 13 \cdot 41 \cdot 9 \cdot 52 \cdot 9$ となり、平均は22、信頼度の高い最大値は40となり、その差は約2倍となる。瓦器碗は同様な補正で、単位3の集落から順番に $25 \cdot 16 \cdot 26 \cdot 34 \cdot 7 \cdot 18 \cdot 118 \cdot 6 \cdot 43 \cdot 8$ となり、信頼度の低い単位9を除けば最大値は43となる。

一方これらのデータに対し、各々の屋地は、村落内でどのような位置関係にあったのだろうか。土師器皿は、東西道に面した単位の4と9が40で、それ以外は10程度、瓦器碗は集落の推定範囲に対する調査面積の少なさから信頼度の低い単位7・9を除外すれば、集合した集落の西半部は平均が20を越え(23.9)、道から奥に入る単位の10・12は平均が7となっている。いずれも東西道に面する群とそうでない群で違いがあらわれそうである。

これに対し土釜は、西から $4 \cdot 3 \cdot 5 \cdot 6 \cdot 4 \cdot 3 \cdot 11 \cdot 7 \cdot 5 \cdot 1$ であり、やはり信頼度の低い単位9の数値を除けば、平均は4.6で最大値は7となる。ところで平均値を越える数値を示したのは単位5・6・10・11であり、その配置は共に東西道から奥へ入った位置にあたる。前記土師器皿・瓦器碗とは対照的な状況と言える。

播鉢は東播系の製品であるが、単位4・6・8・10・11は $3 \cdot 2 \cdot 2 \cdot 4 \cdot 2$ を示し、やはり東西道に面していない集落を中心として3以上の数値を推測することができる。

Bグループは面積が約2500m²であり、単位2のデータを元に、おおむねその最大値をとった。

また一方、この時期の日置荘村落を特徴づけるのは鑄造工人の存在であり、これに対応するのがCグループの単位1の集落である。遺構と遺物の集中する規模はおよそ3600m²を最少としたが、集落の範囲自体は1町四方に準じたものと推定する。最少個体数は、土師器皿94・瓦器碗160・土釜18・播鉢3・甕2である。

また、やや時期幅をもちながら定量分析に現れない資料をみると、一般の中国陶磁器以外に、白磁四耳壺・瀬戸内東部系須恵器・石白が、区画2との境界線からは東海系の播鉢などが出土している。

以上よりこの時期の状況をまとめると、まずAグループについては、東西道との位置関係において、所持していた土器類の様相が分けられそうである。土師器皿・瓦器碗は道路側が20以上で奥側が10程度を示す。一方釜・播鉢は前者ほどの差はみられないが、釜は道路側が3.5、奥側が6、播鉢は道路側が1、奥側が3で土師器皿・瓦器碗とは対照的な関係にみえる。

ところで漆器・陶磁器類の存在に対して、土製の碗・皿が実用品であったかどうかについての疑問が投げかけられている中で、少なくとも播鉢と甕については、この時期まだ、土製品がその代替品となる構造にはいたっていない。したがって最低限の生活に必要な家財道具の数量は、播鉢・甕の状況の中に近く示されているものと考えられる。

そこでこの視点においてこれらのデータをみれば、Aグループでは東西道を基準に2分した両群共、播鉢に対する釜の数が2～3倍となっており、土器供膳具で両群に差が認められるのと同関

係に定量的な共通性が認められる。その状況はBグループにおいても同様であり、やはり釜は播鉢の2～3倍の割合で使用されたようである。

ところがCグループをみると、釜は播鉢の6倍の数値を示し、A・Bグループの釜の量の2～3倍となっている。播鉢と甕に関する先の前提を基にすれば、A～Cグループは播鉢の量においてそれほど差がみられないため、それを使っていた居住人口においても類似した傾向がみられるはずであり、実際に釜についてはA・Bグループで矛盾のない状況を描くことができた。したがってCグループの釜の量を説明するためには、A・Bグループがおこなっていた使用法以外の機能と意味を考えなければならないことになる。

くわえてこの集落の住人は、遺構と遺物の状況から、鉄鍋などの製作に従事した鍛造工人であった可能性のきわめて高いことがわかっている。彼らはこの状況において、ほかの集落よりも鉄鍋を使うに有利な環境にもあったのである。

なお、Cグループで多いのは釜だけではなく、土製供膳具においてもA・Bグループの2～3倍の量を示していることがわかる。その意味で、Cグループでの釜の使われ方には、土製供膳具との共通項も考慮できるものかもしれない。

D IV期 (14世紀)

推測される集落の単位は、規模においてAグループ：600m² (単位1～6・8・9・11)、Bグループ：1200m² (単位7・10・12・16)、Cグループ：2000m² (単位13・14)、Dグループ：12000m² (単位15)に分けられる。なお、推定される集落各々の敷地全てが調査されたと考えられるのは、単位1～3・8～10・14の集落である。

また、単位の全面積に対する調査面積の比が著しく低いこと、集落の領域が未確定な要素を残すことなどにより、単位6・10・12の数値については、信頼度の低いものとなっている。

さてAグループをみると、土師器皿は0.4～25までばらつきがみられるが、単位3・8・9の平均は10程度であり、単位1・2の平均も同様な数値を示す。ここではむしろ単位4・5の値の低さと、単位11の値の高さに注目しておきたい。瓦器碗は、単位8・9が12程度、単位1～5は2を除き5に満たない。

総じて道路に面する集落の方が値が低く、しかし基本的には、皿と碗は1：1に近い比率で持ち合わせている様子がうかがわれる。土釜は、単位8・9が11、単位1～5は5程度、東播播鉢と甕はおおよそ均一で各1程度であるが、甕については、やはり道路沿いの単位が数値の低い状況を見せている。

Bグループの状況は、土師器皿が約20で瓦器碗が約19を示し、比率は1：1に近い。土釜は5程度、播鉢と甕は各1～2を示す。Cグループは、土師器皿が100以上、瓦器碗が概ね90以上で約1：1、土釜が26以上、播鉢が7以上、甕は3を示す。Dグループは、土師器皿が80、瓦器碗が74、土釜が6、播鉢が3、甕が3となっているが、調査面積が推定屋敷地の約1/4と考えられるため、単純補正値はそれぞれ300・280・24・12・12となる。

さてこれを基に各グループの面積比との関連をみると、土器碗と皿は最少個体数が10：20：100：300を示している。これに対して、集落の面積比は1：2：3：20であるため、A：B：Dのグ

ループの関係は概ね一致しているものの、Cグループでの土器碗・皿出土量の、著しく多いことがわかる。土釜の最少個体数は5(11)：5：26：24であり、面積比と無関係な状況である。播鉢と甕は、A・Bグループが1～2であるのに対して、Cグループは7と3以上、Dグループは12程度と推定される。やはり面積比と無関係でなおかつ、A・Bグループに対するC・Dグループといった構造がみえ、あわせてその比は約1：5になっていることがわかる。

なお、土製煮炊具であるが、鉄製品の存在が当然考慮される環境において、A・BグループとC・Dグループの比は、Ⅲ期のところでみてきたように、代替品が無いために、実際の状況をより示していると推定される播鉢・甕の比率同様に、概ね1：5となっている。したがってこの器種についても、鉄製品の存在を考慮してなお、実用の家財道具であった状況が看取される。

さて、Aグループを基準とした場合、面積が2倍規模のBグループは、しかし播鉢の量に見られるその使用者の数は同規模で、土製の碗・皿も、面積比率同様2倍の消費を示す。一方、Cグループは、面積がAグループの約3倍であるのに対して、使用者人口は5倍、土製碗・皿の消費は10倍にのぼる。またA・Bグループに対して面積当りの使用者人口比は5/3倍、土製碗・皿の消費は2倍となっている。

一方これを一人当たりの専有面積でみると、DグループはCグループに対し6倍以上の敷地面積を有しているにもかかわらず、生活人口が同規模であるため、仮にAグループの集落(面積600m²)に6人が居住していたとするならば、Dグループはその20倍の面積(12000m²)の屋敷地に、5倍の30人が居住していたことになり、その一人当たりの占有面積比は600/6：12000/30となり、Dグループの居住者はAグループの居住者に対して4倍の占有面積をもっていたことになる。

また土製碗・皿の消費も、Aグループの単位人口当りの値に対して6倍の数値となっている。占有空間と家財道具に関して、AグループとDグループでは、少なくとも4倍以上の差がみられることになるのである。

一方重量個体数分析に反映されない資料については、器種別の出土分布から検討を加えてみたい。このうち、この時期に関係する資料は、山茶碗・常滑窯系播鉢・石鍋・石臼・土師器京都型皿の一部・瓦器仏具類・瓦器火鉢の一部である。これらの資料の中で特に分布の偏りと集落との関係をみれば、山茶碗は集落14・15のC・Dグループ、常滑窯系播鉢はC・Dグループと集落7以降の東西道路に面さない集落群、土師器京都型皿はDグループでもみられるものの、分布の中心は集落7と2・8にある。瓦器火鉢についても同様な状況がみられ、仏具についてもC・Dグループ以外に集落8での出土をみることができる。

以上、出土資料の最少個体数と分布の偏在傾向から、この村落は東西道路に面したAグループを最小の単位として、東海系などの特異な流通品をもち、Aグループの4～6倍以上の家財を格差にもつ集落15を最大の規模として、規模は異なるものの、存在形態としては集落15に近似した立場の集落13・14と、中間層としての、東西道路に面さない一群、および火鉢などに特徴を有する集落7を核とした群の5群に分類できるものと考えられるのである。

E V期 (15世紀)

推測される集落は、規模においてAグループ(600m²)、Bグループ(1200m²)、Cグループ(2000m²)、Dグループ(3600m²)に分けられる。Aグループの土釜は、西から1・14・10・17・6・11・10・5であるが、集落2・6・11は調査区の関係で信頼度が低いいため除けば、平均13のおおむね同様な状況を示す。また播鉢についても同様に平均9(備前窯播鉢1を含む)の類似した数値が示される。

Bグループは播鉢の数値に差がみられるが、釜は4を共通の数値とできそうであり、播鉢についても集落7の数値(4)を使えるものとする。

Cグループについては、集落12の遺構の状況が集落13・14と異なるため、後者についてみると、釜・播鉢共に9が妥当と考えられる。またDグループについては集落1を基準に数値を得ることができるものとする。

以上より整理できることとして、まず第一には、播鉢と甕の量が、集落の規模に対してそれほど関係の無い状況がうかがわれる。この時期は前代にみられた階層の整った関係が崩れ、少なくとも調査区の範囲では、全体に平均化された村落景観が復原できるものと思われるが、最少個体数にみられる内容は、この状況とも関わっているものかもしれない。

次いで指摘できる点が、釜と播鉢の量比である。これまでⅢ期、Ⅳ期と異なった量比を復原してきたが、ここではいずれのグループにおいても、両者は同等に近い関係を示すものとなっている。そしてその傾向には、集落の規模に対しての2つのあり方が認められそうである。すなわち1200m²以下のグループでは播鉢の量が増え、逆に2000m²以上のグループでは土釜の量が減っているのである。

この時期以降、大阪府南部地域では瓦質焼成の播鉢が多くみられるようになるが、小型の規模の集落における播鉢の量の増加は、使用頻度の増加と耐久性の退行によるものなのであろうか。また大型の規模の集落において土製煮炊具の量が減るのは、それに代わる製品が広く用いられたことによるものなのであろうか。

なおこの時期に現れる集落1は、多量の鑄造関連遺物も出土している。

F VI期 (16世紀前半)

推測される集落は3カ所で復原できるが、データ数が少なく、集落2などはそれが単一の集落であるのかどうか不明な部分が多い。集落の同定が不十分である以上、最少個体数の信頼度は乏しいものとなるが、釜と播鉢において量比が類似している状況は、前代同様に認められる点であろう。

③小結

日置荘遺跡(その2)調査区のデータを基に、時代毎にみた集落(屋地または屋敷地)単位での、各器種にみられる定量分析をおこなってきた。

ところで、これまでおこなわれてきた定量分析は、生産と流通および時代の特徴を整理するためにおこなわれる場合が多く、土器・陶磁器は、生産地別あるいは貿易陶磁器や土器皿のような特定器種の集計を基準とし、その評価はあくまで相対的な傾向の説明に限定されるものとなっていた。

ところが小稿の目的は、実際に使われていた内容の検討であり、そこで明らかにしなければいけないのは、極端な例をあげれば、任意の時代の標準的とされる家族構成をもった農家（あるいは職人の家、または町屋、武家屋敷など）の場合、おこなわれていた調理はどのようなものであり、調理場はどのくらいの規模であり、その配置はどのようになっており、そこで使われていた調理具と食器はそれぞれどのくらいの数であったのか、である。

そのため、限られたデータの中で、当時の景観にできるだけ沿った物質資料のとりあつかいをするべく、もっとも合理的な方法による整理を試みてきたわけであるが、その中で注意しなければならぬのが、定量を評価する際に基準とするデータの取り扱い方である。

先に述べたように、供膳具と煮炊具は発掘資料としては土製品が目立つが、実際にその機能を果たしていたものを考えると、漆器と鉄製品もかなりの比重をもって考慮しなければならない。またよく知られているように、河内・和泉において土釜の比率は中世後期に大きくのびるが、これは実際に土釜の出土量が増える以上に、中世前期にあった瓦器碗が消滅するため、相対的に比率が高くなった結果とも言える面をもっているのである。そして同様な状況は土釜以外にも、土製供膳具の多くみられる地域であれば、それとの関係でどの器種についてもみられることなのである。

このように中世の考古資料をあつかった定量分析は、それを変遷の中でとらえた場合は、土器・陶磁器だけの考察においても、相対的に基準となる器種が時代を通じて存在しないために、現実的には、おそらく整合性を伴わないと推定できる結果を示す場合が多くなってきている。ましてこれを食文化あるいは生活文化総体の視点で考えるのであれば、土器・陶磁器類に限ったその相対比だけの整理では、その結果はあまり意味をなさないものとなる。

しかるにそれではこの資料整理が全く無意味な作業であるのかといえば、それは必ずしもそうではない。最大の問題は、土製供膳具の多くが中世を通じた定量分析のデータとして取り扱うことができない点、そして土器製品にとらわれている限り、実際に機能を果たしていた非土器製品の存在が反映されない点、の2点なのである。したがって、これを除き、さらに普遍的にみられる発掘資料の中で、中世の生活用品の主体であり、なおかつ中世を通じて存在する資料を基準とすれば、この障害の多くは克服されるはずである。

そこでこの条件を満たす資料を探すと、それは播鉢であることがわかる。播鉢は少なくとも11世紀以降、現代まで続いて使われている生活用品であり、しかも同様な機能をもつその素材は、石製品を除き土器・陶磁器以外には存在しない。また石製品は定量が少ないため、特定の地域を除き、機能的に播鉢をおびやかす存在とはならない。基本的に、地域と時代を超えて普遍的にみられる考古資料として、また中世の食文化を代表する粉食の用具として、播鉢は中世の考古資料の定量分析の基準とされる条件を満たしているものと言えるのである。

さて、以上の要件を前提として、あらためて播鉢と土釜における日置荘遺跡の定量分析をふりかえると、土製煮炊具は、時代・集落の規模・集落の性格などによって、それぞれ一様ではない使われ方をしていた状況を見ることができると考える（表2）。

時代毎にみれば、おおむね12世紀が土釜1：播鉢1、13世紀が2：1および集落1は6：1、14世紀は5：2と3：2、15世紀は1：1と2：1、16世紀は1：1を示す。細部は異なるものの、土釜は播鉢に対して必ず同等以上、おそらく最低でも2倍以上の比率で用いられたことが推定され

表2 集落の推定復原面積による最少個体数の整理 (面積はm²)

る。

次いで集落規模との関係でみれば、全時代を通じて土釜の最少個体数の最も多いのは、14世紀のC・Dグループであり、その数は24以上である。一方これらを単位面積で表すと、集落規模の合計が48400m²であるのに対し、土釜の最少個体数の合計は135個であるため、土釜1個あたりの平均集落規模は358.52m²となる。基準を変えれば、その平均は、約3000m²の集落に9個の土釜がみられるということになる。

しかしこれは個々の集落または屋地の個性を無視した数値であり、そこにどれほどの意味があるのかはわからない。そこで、次に集落の規模毎に見ていくと、最初に600m²規模の集落では、14世紀が5に対し15世紀は11と2倍の数値を示す。このケースの場合、播鉢・甕についても同様な増加がみられるため、この規模の集落においては、15世紀において土釜の使用が増えたと言っても良いものとする。

次に1200～1600m²規模の集落をみると、土釜の数は、13世紀が7、14世紀が5、15世紀が4である。一方播鉢はそれぞれ4・1.5・4である。13世紀の集落規模が他に対して1.3倍であることを考慮すると、この集落規模のあり方は、時代を通じてあまり変化しないとみることができるとも考えられない。ちなみに先に示した総合平均の数値を1/2にすると約1500m²に4～5個の土釜となり、この集落規模の実態に近いものとなる。

2000～2500m²規模の集落については、土釜の数は、13世紀が5、14世紀が26、15世紀が9、16世紀が4とばらつきが大きく、このままでは評価ができない。また3600m²～5000m²規模の集落についてみると、12世紀は1、13世紀は18、15世紀は8、16世紀は2であり、やはりこのデータからは規則性を読みとることができない。

そこで2000m²規模以上の集落について、この日置荘村落内での時代毎の位置付けから検討してみたい。まず13世紀についてみれば、村の中心はおそらく集落1であり、集落2は規模こそは集落3以降より大きいものの、性格はそれらに類似していたものと考えられる。次いで14世紀については、村は階層の整った構造をもち、先に述べたように、Cグループの集落13・14は、規模以上に、村の核であった集落15の屋敷地と類似した性格をもっていた。したがってその内容を13世紀の集落に対応させれば、それは13世紀の村の核であった集落1に近いことになる。14世紀のCグループで土釜の数量が卓越するのは、これが背景と考えられようか。

一方15世紀についてみれば、前代で村の核に近い存在であった集落13・14は、集落15の衰退または役割交代によって同様の变化をみせたものと推定できる。これを前提とすれば、土釜の数量が減少することも矛盾はしないことになる。

このように、集落規模の現象的な面ばかりでなく、村落内での集落の位置づけを考慮すると、おそらく最少個体数の煮炊具の基本形は、約1500m²の集落規模（屋地または屋敷）に対し、鉄鍋と4～5個の土釜の使用であり、この比率を逸脱するケースは、より生活人数が多いためその消費量も多くなる、村落内で階層の高い集落、または、逆に人数は同等か、より少ないのに対して、1500m²規模の集落で用いることのできた非土製煮炊具の使用がなかった結果の現象ではないか、と考えることも可能かもしれない。

ところで当遺跡を含む丹比地域は、平安時代末期から鎌倉時代を中心に活躍した「河内鋳物師」

の本拠地であり、そのなかでも「日置荘」については、仁安2年（1167）の藏人所牒にみられる「興福寺領日置荘，雑役免除」の記事，および当地が金田・長曾根と並ぶ「右方」鑄物師の拠点であったことが記載されている弘長2年（1262）の記事などで，文献史的にも知られている地区であった。

そしてこの「右方」鑄物師については，各地に残された梵鐘の銘文などによって，「丹治」姓の鑄物師のなかにその姿をみることができるとされている。例えば承元4年（1210）には，河内の住人として丹治則高が知られ，建保3年（1215）には国則，同7年（1219）には則俊，寛元4年（1246）には国高と国貞・国則ら，建長3年（1251）には国忠，そして文応元年（1260）には丹治久友の名をみることができる。この時期にこの地域を拠点として，複数の丹治姓鑄物師が活躍していたようである⁶⁾。

一方日置荘村落では，13世紀代において集落1がその鑄造工人の居住集落に比定され，B・Cトレンチからもその部分的な遺構を得ている。彼らは数町を隔てながら1町規模の屋敷地に居住して，仏具と日常品を鑄造し，定住的な生活をおくっていたものと推定される。

このような鑄物師達にとって，煮炊には自分たちの作った鉄鍋を使うものと考えることが自然であろう。ところが先に見てきたように，13世紀の集落の中でみられる土釜のデータは，このIトレンチの集落1が最も高い数値を示しているのである。その説明については，村落内での集落の位置づけとの視点から先に整理してみたが，鉄鍋を使用してなお，土釜も使用されていた数値の基準を示すひとつのあり方と言えるのだろうか。

図7 中世京都における土器・陶磁器の定量グラフ

図8 中世京都の土製煮炊具(烏丸線遺跡)

(1 No.80土坑55, 2 No.62溝1, 3 No.72土坑75, 4 No.80土坑42)

他地域の状況と比較する中でさらに考察を続けたい。

京 都

京都における土器・陶磁器の出土状況を白河北殿北辺の調査にみると⁽⁷⁾、平安京Ⅲ期から中世京都Ⅱ期において、土師器の比率は95.7%~100%で、平均は98.8%を占めている。この数値が京都市内全域に適用されるわけではないが、他の調査地点においても、土師器皿は出土遺物の中でおよそ80%以上の量を占めるものであり、それ以外の土器・陶磁器の比率は数%程度にとどまっていると言っても過言ではないだろう。

一方播鉢と土製煮炊具の関係をみると、平安京左京八条三坊では⁽⁸⁾、Ⅱ期とされる13世紀代の遺構で、瓦器の鍋・釜が20、東播系播鉢が60みえ、その比は0.3:1を示す。またⅢ期とされる14世紀代の資料では、瓦器の鍋釜が852、東播系および備前系播鉢が349みえ、その比率は2.44:1となっている。この遺跡はⅡ期では多量の輸入陶磁器が遺構に廃棄され、Ⅲ期後半には金属加工に関連する遺構が検出されるなど、一般の民家とは異なった住人の性格を想定することができる。

また時期は限定できないが、烏丸線内遺跡 No. 80の資料によれば⁽⁹⁾、中世全般の合計数量として、瓦器の鍋が263、釜が269、東播系播鉢が873、備前系播鉢が382点出土しており、煮炊具と播鉢の比は532:1255で0.42:1となる。この地点は四条綾小路にあたるが、鎌倉時代後期から室町時代前期に比定されているプラン4・3および土坑66から金属加工に関わる遺物が出土しており、やはり一般の民家とは違う使われ方をした時期があったことを示している。なお土師器皿の量は28584であり、鎌倉・室町期の器種の判別できた土器・陶磁器類の中で84%の比率を示す。

また京都に隣接する集落としては、京都市街を南西へ出た久我東町遺跡で溝で囲まれた室町時代の集落が調査されている。区画内には4×6間、7×8間、7×3間など7棟以上の建物が並び、時期を異にした木棺墓・土壙墓などもみられる。13世紀後半代の器種構成としては、SD601で土師器皿・瓦器碗などの食器が95.25%、調理器が4.11%、貯蔵器が0.4%、SK36では食器が95.85%、調理器が2.75%、貯蔵器が0.75%を占める一方で、調理器が28%または55%を越えるケースも報告されている⁽¹⁰⁾。

ところで都市京都の場合、その構成員は前項と異なり、例えば農耕民といった単一の個性で整理

図9 土製煮炊具と播鉢の定量データ

できるものではなく、武家・公家・商人・寺社・職人をはじめとする多種多様な生活様式をもった人々を推定しなければならない。そのため任意の調査地点と遺構をとりあげ、その資料を整理したとしても、それがどのような環境を背景として廃棄されたものであるのかを事前に検討しないと、京都のある時期に住んでいた人の使った土器・陶磁器の構成としては、当時の実態から遊離したものになってしまう危険性がある。

しかし現状において、そのような遺跡の性格をある程度見通した段階での分析は困難な状況にあり、それは今後も早急には解決できる問題ではないものと思われる。

そこでここでは、京都市内の発掘調査データの中から、報告されている595カ所の遺構および一括性の高い包含層出土資料をとりあげ、そのそれぞれについて一括遺物内の数量（破片数・個体数など）およびその比率にこだわるのではなく、土師器皿に共伴している資料の種類（器種）別にその有無をチェックし、それにポイントを付与する方法を試みた⁽¹¹⁾。

京都のような重層的で、なおかつ居住者の分類推定の困難な都市遺跡では、定量分析にあたって逆に調査地点がもつ個々の特質を排除し、階層・性格等の相違を全て相殺した形の、実態としては存在しないが、総合的な仮想京都に対する分析が有効ではないかと考えたのである。

例えば、ある土坑の出土遺物が土師器皿30点、瓦器鍋5点、魚住窯播鉢2点、常滑窯甕3点であった場合、この方法でのこの遺構の内容物の登録は、瓦器鍋1・魚住窯播鉢1・常滑窯甕1となる。破片数とも個体数とも異なる係数であり、取り扱う資料数が少ない場合は単なる時期別出土遺物の傾向を示すにすぎないが、ここでは600近いデータを用いているため、時期毎の疑似数量を示すことができたものとする。

グラフは土師器皿を基準とした25年毎の編年において、時期毎で異なるサンプル数を各時期共に平均に近い30カ所に補正し、その数の遺構を調査した場合にみられる陶磁器類の有無を、器種別の大区分と生産地別の細分で集計して表示したものである。既に別稿で整理しているように、おおむね14世紀代を転換期として土器・陶磁器の様相に変化のあったことが定量的にみてとれる（図7）。

さて土製の煮炊具は、瓦器の鍋・釜が主体となり中世を通じてみることのできる（図8）。最初に鍋と釜の定量的な関係を考えてみる。30に統一して補正した資料数を基準とすれば、そこで検出される釜の数は最少0.57、最大11.9であり、12世紀後半から16世紀初頭の平均は7.17、鍋の数は最少1.7、最大10.6であり、13世紀から16世紀前半の平均は5.7で、釜に比べて鍋のポイントがやや低い数値を示している。しかしこれらの数値は詳しくみると、釜では8.2と4.6に2つの平均を、鍋においても8.06と4.24の2つの平均をもっており、一概に鍋の出土頻度が釜より低いものとは言にくい部分もある（表3）。

次にこれら土製煮炊具の合計数値を中世を通じた変遷の中でみると、それはグラフにみられるように、おおむね10を越えるポイントで15世紀代まで続き、16世紀にはいと急激にその数を減らしていることがわかる（図9）。一見してこの状況は、鉄鍋が普及した結果、土製煮炊具の役割が低下してしまった構図にもみえなくはない。しかし播鉢の合計数量との関係で見た場合、そこにまた別の影響も考慮される余地が出てくる。

播鉢の合計数値の変遷をみると、12世紀後半～14世紀代の平均は11でおおむね一定した値をみることができ、15世紀代にポイントを下げるものの、16世紀は14世紀代までより逆に高い数値を示し

表3 土製煮炊具と播鉢の定量データ

ているのである。

つまり、これまでの整理と同様に土製煮炊具と播鉢の関係をみると、おおむね15世紀までの段階では、1:1または土製煮炊具がやや多い傾向でみられるが、16世紀以降は土製煮炊具の役割低下と播鉢使用機会の増大といった対照的な現象が同時にみられるのである。

ひとつの食文化を構成するこれらの器種において、両者の間には密接な関係があると考えられるものであるが、その意味において、土製煮炊具の16世紀代における役割低下は、単に鉄鍋との関係だけで語られるものではなく、播鉢使用量の増大も含めた食文化全体の変化の中でとらえなければならぬ現象の可能性があると言えるのである。

さらにそれを補足する要素として鍋と釜別々の定量変化をみると、実は16世紀になって減少しているのは釜であり、鍋は15世紀前半の段階で既に出土のポイントを減らしているのである。前稿でまとめたように、土製の鍋・釜を共にもっているのは、京都をはじめとするわずかな地域であり、汎日本的には基本的に土製の煮炊具は鍋または釜のみの使用が一般的であった。

その状況下において、京都で出土する瓦器の鍋・釜はどのような役割分担がとられていたのかが問題となるわけであるが、ここでみられる数値の減少時期のずれを基にすれば、他地域との対比においてそれらの形態が機能を反映していない可能性と別に、そこに明確な使用法の差のあったことも指摘できることになる。

なお、鍋のポイントが減少する15世紀前半は、その形態が、浅く体部の開いたものに変化する時期であり、また釜は頸部の長い新しい器種が出現する時期でもある。その意味で使用法の差を、この時期のこの点にのみ集約して説明することも可能ではあるかもしれない。

次章でさらに検証を加えることにしたい。

ところで烏丸線内遺跡による遺構表をみると、No.73地点⁽¹²⁾では5×30m (150m²・約45坪)の調査面積で鎌倉・室町時代の約400年間に13世紀(80)、14世紀(26)、15世紀(23)、16世紀(22)の合計151の遺構が報告されている。これを25年単位で単純平均すれば150m²の敷地で25年あたり、9.4個の遺構が形成されることになる。同様にNo.77地点では12×6.5m (78m²・約24坪)の調査面積に合計153の遺構が検出されているため、単純係数は25年あたり9.6個となる。またNo.80では面積15.5×5m (77.5m²・約23坪)に対し、遺構の合計数は121で25年あたりは7.6個となる。

一方高橋康夫氏による宝徳四年(1452)以前の土御門四丁町の敷地構造をみると⁽¹³⁾、その内部は36筆の敷地から構成され、最大は間口・奥行共に20丈の面積400平方丈、最少は間口1丈、奥行2丈の面積2平方丈とされ、その典型は間口3丈、奥行10丈の面積30平方丈に整理されている。さらにその住人との関係をみると、間口2丈以下、面積20平方丈以下の敷地は、身分・職業の不明な百姓とされ、番匠をはじめとする職人層の敷地が平均29.3平方丈を示すものとなっている。

厳密な計算はできないが、1丈=約3mとすると、中世京都の平均的な敷地面積は9×30mの270m²(約80坪)に換算することができようか。

そこで先の単位年代あたりの遺構数にもどると、No.73地点では0.06個/m²、No.77地点では0.12個/m²、No.80地点では0.1個/m²であり、その平均は0.09個/m²となる。したがって単純計算では、中世京都における1屋地あたりの25年間での遺構の形成数は、270m²×0.09個/m²=24個ということになる。

これまであつかつてきた遺構単位での出土土器・陶磁器の定量分析は、25年単位で30遺構を調査した場合を例としてきたが、上記の経過に依れば、その数値は土御門四丁町において典型とされる屋地規模の約1.25倍に換算される面積と対比されることになる。一方この定量分析は個体数を表してはいないが、破片数よりむしろ最少の個体数に近い関係でみることはできるはずである。

したがって13・14世紀代をとってみると、四半世紀の単位において、この時期の1屋地あたりの面積がやはり約80坪であったとした場合、これまであつかつてきた595カ所の遺構データから算出された数値は、それに24/30を乗じることにより、当時の1屋地あたりの最少個体数に準じた数を示していると言って良いことになる。

この場合、土製煮炊具は11個、播鉢は約9個の最少個体数に準じる値を示すことになり、その関係は日置荘遺跡15世紀のAグループの数値に近いものとなっている。また15世紀代の京都は、土製煮炊具と播鉢の比率が大きかった点で、逆に日置荘遺跡の13・14世紀代の状況に対比される。

今その評価をおこなうのは難しい状況にあるが、前者については、あるいは中世前期の都市京都と、中世後期になって成長する一地域の都市的な場を共通の基盤とした、土製煮炊具と播鉢の関係を物語る数値と言えるものかもしれない。さらに検討が必要である。

各地の定量分析

○金井遺跡 (埼玉県坂戸市)⁽¹⁴⁾ (図10・11) (補註1)

遺跡は越辺川をのぞむ毛呂台地の丘陵先端に立地し、中世では鑄造関連遺構を中心とした第Ⅱ期(13世紀中葉～14世紀前半)と、その後の集落遺跡として位置付けられる第Ⅲ期(14世紀後半～15世紀前半)に分けられている。このうち第Ⅱ期では播鉢は東海系の製品が、煮炊具は鑄型ではあるが鉄製鍋・釜の存在が推測される。もとより中世前期の東日本は土製煮炊具の存在しない地域であり、また当該遺跡においては鑄造関連の遺構が集中するところからも推して、この問題を扱うには特殊な事情を考慮しなければならないことになる。

一方第Ⅲ期は煮炊具に内耳鍋が登場し、在地生産の播鉢とあわせて西日本と対比可能な状況を呈する。報告によれば、この時期に該当する在地製の播鉢は135点、内耳鍋は327点であり、これに同時期に比定される常滑窯系播鉢を加え、煮炊具と播鉢の比はおおよそ2:1を示すものと言える。

○辰口西部遺跡 (石川県辰口町)⁽¹⁵⁾ (図11)

加賀のほぼ中央部に位置し、手取川の扇状地南端で同川に近い山際に立地する。中世は13～14世紀を中心とし、建物群などが検出されている。G地区14号土坑をみれば、個体数計算で土師器鍋が

図10 本宿・郷土遺跡出土の播鉢・内耳土器、鑄型および鉄鍋復原図

(群馬県富岡市教育委員会 1981【本宿・郷土遺跡発掘調査報告書】)

2点、播鉢は加賀窯5，珠洲窯6，越前窯1の合計12点である。土師器鍋は丸みのある胴部から口縁部を「L」字状に外折させたもので、口縁部はやや内彎気味に仕上げられている。内面全体と外面の底部にはハケ調整が施され、E地区下層出土の鍋には口縁部に穿孔がみられる。なお他の遺構・包含層をあわせた数値は、破片数で土師器鍋94に対し播鉢181（加賀74・珠洲82・越前25）とされている。

○普正寺遺跡（石川県金沢市）⁽¹⁶⁾

日本海に面する安原海岸砂丘の犀川河口に近接して立地する。出土した多様な陶磁器と遺跡の立地などから、港湾機能を備えた集落遺跡としてのとらえかたがなされている。中心時期は14世紀後半～15世紀前半とされる。播鉢は珠洲窯191，越前窯22であり、土製煮炊具は瓦器釜が13および滑石製石鍋が報告されている。北陸では稀な土製煮炊具を出土した遺跡であると言えるが、この釜は畿内からの搬入品と考えられており、基本的にこの地域でのこの時期の煮炊具は土製品以外に求められることになる。

○室遺跡（愛知県西尾市）⁽¹⁷⁾（図11）

広田川によって形成された自然堤防上に立地する。中世においては区画溝で囲まれた7カ所の屋敷地が確認され、地籍図、遺物の定量分析、胎土分析による遺物の移動などをてがかりに、集落の詳細な復原検討がおこなわれている。

区画溝をもった屋敷地は13世紀前半に出現するが、この遺跡全体にその景観が整うのは14世紀後半以降であり、16世紀初頭にいずれも廃絶するとされている。日置荘遺跡と類似した状況であると言えよう。調理具と貯蔵具の比が11～12：1である可能性、土師器皿の分散的な分布から、その日常性を指摘した点など、興味深い考察が多くおこなわれているが、詳細は該報告にゆずることとし、

図11 金井遺跡(1～6)，辰口西部遺跡(7～10)，室遺跡(11～15)の土製煮炊具と播鉢
(1・2は漆器碗)

ここでは煮炊具と播鉢の関係についてのみ見ていくことにする。基本的に煮炊具は土師器鍋・釜、播鉢は山茶碗・常滑窯から構成される。総破片数のデータによれば、屋敷地 A は煮炊具：播鉢が 1151：172=6.7：1（口縁部では3.2：1）、屋敷地 B は6.9：1（2.5：1）、屋敷地 C は8.3：1（7.9：1）、屋敷地 D は7.8：1（3.2：1）、屋敷地 E は6.8：1（3.5：1）、屋敷地 F は5.6：1（0.4：1）、屋敷地 G は11.2：1（3.7：1）を示し、総破片数ではばらつきが大きいですが、口縁部のデータを用いれば、おおむね3.2～3.7：1の関係にあることがわかる。

○馬場遺跡（三重県上野市）⁽¹⁸⁾

馬場遺跡は上野盆地の一角をなす極めて小さな盆中盆地にあたり、地形的には久米川最上流左岸の段丘上に立地する。A区出土の遺物破片総数1372点のうち、土師器釜は28、土師器鍋は14、瓦器鍋は2、東海系の無釉播鉢が4、信楽播鉢が10、瀬戸播鉢が6、美濃播鉢が12とされている。時期幅が長いため比較は難しいが、煮炊具44に対し播鉢類は32を数えることになる。

○原出遺跡（三重県名張市）⁽¹⁹⁾

原出遺跡は名張川が名張盆地の東北部で東から北へ大きく湾曲する右岸の、比高差約10mを測る高位段丘上に立地する。調査により6棟の建物が検出されたが、これらは東大寺領伊賀国黒田庄の関連遺構として位置付けられており、屋敷を限る溝、青磁碗、鍛冶関連遺物の出土からその一部は有力農民層の住居であった可能性が指摘されている。

B地区約1000m²の調査区で6棟の建物が検出され、その一部は溝で区画されている。時期は13世紀代に比定される。鍋6点、播鉢1点であるが、時期幅は広い可能性がある。

○多気遺跡（三重県一志郡美杉村）⁽²⁰⁾

大蓮寺の建立時に関わる工房跡・大蓮寺跡などが発見された。時期は14世紀末～16世紀代とされる。4×9間の大型総柱建物ほか、掘立柱建物の周囲を「コ」字状に囲んで分布する円形土坑群が検出され、特に後者については工房跡としての性格が推定されている。

遺物についてみると、工房跡からは14世紀後葉～15世紀前半の資料が出土しているが、鍋は南伊勢系の土師器が多く145点、土師器釜は7点、大和または伊賀からの瓦器鍋が2点、播鉢は常滑窯の播目の無いものが3、信楽窯系播鉢が1であった。

一方大蓮寺跡周辺では、15世紀後葉～16世紀第3四半期にかけての資料がみられるが、鍋は南伊勢系鍋が79、茶釜5、土釜2、播鉢は瀬戸窯が23、常滑窯が10、信楽窯が5、大和系の瓦器が1となっており、いずれも播鉢に対する煮炊具の比率の高いものとなっている。

○北野腰越遺跡（奈良県山辺郡山添村）⁽²¹⁾

中世後期の城郭遺跡である。15世紀代に比定されるSK1・SD1によれば、土師器鍋・釜は19、瓦器釜は1、瓦器播鉢は8、信楽播鉢は5とされ、煮炊具と播鉢類の比率は20：13である。

○布留遺跡（奈良県天理市）⁽²²⁾

出土状況は布留川の東部地区段丘崖に認められた包含層であるが、調査地の東方500mの位置に石上神宮があり、その一族の居宅との関係が指摘されている。掲載図面によれば、東播系播鉢（13世紀）16・（14世紀）12、瓦器播鉢（15世紀）13・（16世紀）1、瓦器釜（13～14世紀）4・（15世紀）4・（16世紀）5、土師器釜（13～14世紀）30・（15世紀）82・（16世紀）54、石鍋7であり、それぞれ煮炊具：播鉢=34：28（13～14世紀）、86：13（15世紀）、59：1（16世紀）とされる。

○菱木下遺跡（大阪府堺市）⁽²³⁾

泉北丘陵はその先端で堺市街につながる石津川の氾濫原へのぞむが、この遺跡はその中位段丘の先端に立地する寺域（釈尊寺）およびそれに隣接する集落遺跡である。13・14世紀代埋没の遺構集計によれば、釜は土師器1908・瓦器39の合計1947、播鉢は瓦器6・東播系149・陶器57の合計212、煮炊具と播鉢の比は9.2：1となる。また15世紀代埋没の遺構集計によれば、釜は土師器722・瓦器1032の合計1754、播鉢は東播系216・瓦器405・陶器22の合計643、煮炊具と播鉢の比は2.7：1となっている。

なお興味深いデータとして、この遺跡では第Ⅲ調査区が寺域と推定されているが、第Ⅱ調査区では土釜と播鉢の比が19：1であるのに対し、第Ⅲ調査区では4.8：1となり、また寺域では特に東海系など東播系以外の製品を含めた播鉢の多さが目立っている。さらに調査面積をみるとⅡ区とⅢ区の比は4.5：6であるのに対し、播鉢の量は74：132であるため、単位面積当たりの播鉢量の比は99：132となり、相対的に土製煮炊具の寺域での用いられ方の少なさ、一般村落に対する地位の低さが推測されることになる。土製煮炊具と鉄製煮炊具の役割をうかがうてがかりになるものであろうか。

○若江遺跡（東大阪市）⁽²⁴⁾

神並遺跡の南西に位置する弥生～中世の複合遺跡である。記録によれば14世紀終わり頃から文明9年（1477）まで畠山氏により河内の守護所として機能し、その後永禄11年（1568）には三好義継が築城し、天正元年（1573）～8年（1580）には石山本願寺攻めの拠点として織田信長が使用している。一方14世紀以前の遺構と遺物も検出されおり、その時期の数量をみると13世紀代では土師器釜162・瓦器釜1・瓦器脚24、東播系播鉢12で煮炊具：播鉢は15.6：1、14世紀代は土師器釜154・瓦器釜5・瓦器脚4、東播系播鉢1となっている。

○平井遺跡（堺市）⁽²⁵⁾

応永9年（1402）の金剛寺文書に「和泉国八田庄内平井村金剛院僧職也」の記載がある。中世を中心とした集落遺跡であり、13世紀前半代の瓦器碗焼成窯の検出が知られている。このうち15・16世紀代の遺構は水田と水利施設であり、遺物は瓦器釜6078点、播鉢1656点、甕1043点、鍋32点、火鉢類66点、貿易陶磁器52点であり、煮炊具と播鉢の比は3.7：1である。

○山直中遺跡（岸和田市）⁽²⁶⁾

中世前期を中心とする集落遺跡である。12世紀代には柵をもつ4×4間の建物を含めて3棟が建ち、13世紀代には位置を変え2棟の建物がみられる。なお井戸7から元徳2年（1330）銘木簡が出土している。瓦器碗類44302点、須恵器鉢323点、瓦器播鉢49点、土師器釜627点、瓦器釜450点、貿易陶磁器152点であり、煮炊具と播鉢の比は2.9：1を示す。

○二俣池北遺跡（岸和田市）⁽²⁷⁾

古墳時代後期から奈良時代を中心とした集落遺跡である。中世の状況は主に耕作地であり、2・3区の遺物は13・14世紀代を中心としている。瓦器碗・皿は9079点、土師器皿は2111点、釜は397点、須恵器鉢は101点、瓦器釜は115点、瓦器鉢は53点である。煮炊具と播鉢の比は3.3：1である。

○東家遺跡（和歌山県橋本市）⁽²⁸⁾

宇佐美氏の屋敷である可能性が指摘されている集落遺跡である。資料は13世紀代からみられるが、

14世紀後半には幅4.8mの溝と竪穴状遺構をもち、常滑窯・備前窯および中国製の陶磁器をみることができる。破片数は、13世紀代が土師器鍋20に対して、瓦器播鉢1と須恵器播鉢5、14世紀代が土師器釜・鍋4に対して、備前窯播鉢5、土師器播鉢2、瓦器播鉢4、須恵器播鉢1である。土製煮炊具と播鉢の比は13世紀が3.3:1、14世紀が0.3:1となっている。

○川除・藤ノ木遺跡（兵庫県三田市）⁽²⁹⁾

平安～鎌倉時代に中心がおかれる集落遺跡である。8×3間または6×4間を最大規模として、少なくとも9カ所の屋敷地が確認されている。その景観は基本的に、同規模の集落が等間隔で点在する小村散居状であり、それぞれ集落は大小の建物数棟の組み合わせで構成されている。煮炊具は土師器鍋および釜であり、播鉢は東播系に依っている。詳細な数値は読みとれないが、12～14世紀において、播鉢は土製煮炊具の2倍までには至らないが、より多い状況にある。

○前田遺跡（鳥取県河原町）⁽³⁰⁾

15～16世紀代を中心とする集落遺跡である。3×5間程の建物を最大規模としてもち、一部の建物は溝または柵でほかと遮蔽される構造をもつ。煮炊具は土師器鍋4、瓦器鍋10、播鉢類は瓦器1、備前窯8であり煮炊具と播鉢の比は1.6:1を示している。

○馬屋遺跡（岡山県山陽町）⁽³¹⁾

岡山県南東部、山陽町の所在する盆地の南西端山際に位置し、古代山陽道のルートに近接する。平安末～鎌倉期を中心とする集落遺跡が調査された。建物の規模は6×2間の主屋に2×1間の角屋を加えたものがあり、それらの中から名主層の屋敷が復原されるものと報告されている。鎌倉期を中心とした掲載資料によれば、東播系播鉢が72、備前窯播鉢が14、亀山他播鉢が5、土師器鍋が18、瓦器釜が5、土師器釜が8であり、備中に比べて釜の比率の高いことがわかる。なお煮炊具と播鉢の比は0.3:1となっている。

○草戸千軒町遺跡（広島県福山市）⁽³²⁾

重量で計測されているため、直接他遺跡との比較は難しいが、煮炊具と播鉢の重量比はおおむね4:1となっている。

○道照遺跡（広島県東広島市）⁽³³⁾

丘陵先端に立地する中世集落および館跡であり、館跡は現況で東辺約75m、西辺約25m、南辺約105m、北辺約125mの規模をもつ。また鍛冶炉をもつ建物遺構が検出されている。13世紀代と推定される遺物群をみると、黒色漆の椀をはじめとする多数の木製品および、土師器製品が出土している。ただし土師器製品の内訳は、ほとんどが杯・皿類であり、煮炊具は釜・鍋など9点を数えるにすぎない。なお播鉢はみられない。

○大門遺跡（香川県高瀬町）⁽³⁴⁾

大門遺跡は三豊郡高瀬町の鬼ヶ白山の南で、高瀬川に面する丘陵末端の狭い平坦地に立地する。掘立柱建物16棟、井戸1基、土坑20基などからなる中世の集落が検出されている。14世紀代のデータをみると、土師器鍋31、釜33に対し、土師器播鉢10、東播系播鉢2、備前窯播鉢3。土製煮炊具と播鉢の比は、4.3:1である。

○東山崎・水田遺跡（香川県高松市）⁽³⁵⁾

水田遺跡は高松平野の東部、春日川と新川にはさまれた氾濫平野に立地する。遺跡は中世までは

氾濫原であったが、13世紀前半～15世紀初頭および16世紀代において、微高地と微高地に挟まれた低地で集落と水田および畑が営まれる。

16世紀後半の資料をみると、個体数で土師器釜は15.87、土師器鍋は5.35で合計は21.22。播鉢は土師器が6.94、備前窯が1.14で合計は8.08。土製煮炊具と播鉢の比は、2.6：1である。

○中島田遺跡・南島田遺跡（徳島県徳島市）⁽³⁶⁾

吉野川と鮎喰川によって形成された沖積平野の一角に立地し、吉野川の河口よりわずかに入った水運の結節点としての位置も指摘されている。14世紀代を中心とする面では、溝とそれに規制された集落の状況が検討される。煮炊具の関係資料は、土師器鍋・釜・脚、瓦器鍋・釜・脚、鉄鍋、石鍋であり、播鉢は土師器・東播系・備前窯の製品がみられる。

中島田遺跡では、土師器鍋45、瓦器鍋7、土師器釜20、瓦器釜16、土師器または瓦器脚が22で、土製煮炊具の合計は110、鍋と釜の比率は1.4：1である。一方播鉢類は土師器2、東播・備前が87で合計89。土製煮炊具と播鉢の比は1.2：1となり、これに再利用可能な鉄鍋の破片が3点加わる。

南島田遺跡では、土師器鍋12、土師器釜10と瓦器釜3でその比はほぼ1：1、合計は25。一方播鉢類の合計は27でそれらの比はほぼ1：1を示し、これに石鍋が3点加わっている。

○柏原 K 遺跡（福岡県福岡市）⁽³⁷⁾（図12・13）

13世紀後半～14世紀前半の居館および水田遺跡である。遺跡は薩摩国入来院家文書の「蒙古合戦勲功賞配分状」と対比され、水田部分は地頭職配分の水田に、字名の「ゴソ」は御所を意味し、方形区画の溝で囲まれた居館の内部は、それぞれ「行武名内一字、惣検校入道、一字六郎」の屋敷に考えられている。

調査面積は15000m²であり、出土した土器・陶磁器の破片数は77413点を数える。なおこのうち76702点が土師器皿とされている。煮炊具は土師器鍋が87点で約15個体。一方播鉢は113点で約25個体であるが、このうち61点は東播系（約11個体）、産地不明の須恵器系が11点（約2個体）、瓦器が31点（約10個体）および産地不明の陶器質の製品（常滑窯系？）が10点（約1個体）と報告されている。

そしてこの遺跡で注目されるのは、これら土器・陶磁器類の出土分布である。屋敷の区画は、大きく2カ所に分けられる。1カ所は調査区の中央に位置し、2重の溝で囲まれたものであり、内側の規模は東西115m、南北47m以上および68m以上であり、東西約1町南北約半町規模の屋敷地と考えることができる。また別の1カ所は前記屋敷地の西に接して位置し、規模は東西38m、南北19mを測る。

遺物の出土状況をみると、後者の区画からは土師器皿・鍋、播鉢および磁器類など、あらゆる器種が出土し、前者の区画では、特にその北部中央での土師器皿に限った大量の出土が認められる。調査者はこの状況により、前者の区画の特に土師器皿の大量出土地点周辺の建物を「特別な行事を行う為のハレの施設」と、そして後者の区画については「日常生活に関連するケの施設が存在した」と考えている。さらに前者の区画のうち、その西南部も、後者の区画同様に様々な器種の出土がみられているため、前者の区画は、東を入り口として、前面に空地をもち、区画の中央に儀式をおこなう主殿、そしてその奥に日常生活の場がおかれていたものと復原できる可能性がある。

さらに日常生活の空間をみれば、そこでは播鉢と土製煮炊具が同様に使われており、その意味で

図12 柏原 K 遺跡(1～6)と本村遺跡(7～9)の播鉢と土製煮炊具

図13 柏原 K 遺跡の遺物出土分布(註37より転載)

土製煮炊具もまた日常品であり、その比率は個体数において播鉢を1とした場合0.6となっている。

○本村遺跡（佐賀県佐賀市）⁽³⁸⁾（図12）

佐賀平野を南北に分ける複合扇状地の末端に位置し、11世紀中葉の周溝を伴う墓から14世紀中葉の屋敷地まで、中世前半の集落の変遷が整理されている。このうち煮炊具についてみると、鍋は12世紀初頭までに甕からの転換がみられるとされ、その結果12世紀中葉までは、口縁部を外折させた汎日本的にみられる通有な器形であり、それが13世紀前葉までには、口縁部に接した鐔状の上面に連続する窪みを付けたこの地域特有な製品となり、さらに14世紀以降はこの鐔状部分が突帯ぎみに退化し、再び汎日本的に共通した、体部の大きく開く器形に変化すると考えられている。

破片数の定量は、13世紀後半～14世紀前半の時期に比定される、方形の区画溝で囲まれた2つの屋敷地の資料をとりあげる。最初に区画溝の遺物をみると、鍋は土師器が250、土師器支脚が8、茶釜が5、石鍋が15で合計278、播鉢類は、土師器11、瓦器が18、須恵器が28、備前窯が1、常滑窯が3で合計61、その比は播鉢1に対し煮炊具4.6である。また同時期の井戸をみると、鍋は土師器が93、支脚が1、石鍋が8で合計102、播鉢類は土師器が1、瓦器が3、須恵器が18、常滑窯が1で合計23、その比は播鉢1に対し煮炊具4.4となっている。

○松原地区遺跡群（宮崎県都城市）⁽³⁹⁾

松原市街地を形成する台地の縁辺部に立地し、13世紀後半から近世まで続く集落遺跡である。このうち13世紀後半には、幅約4m、深さ約2mの溝で区画された70×80mの規模の屋敷地がみられ、15世紀以降には東日本でみられる方形堅穴と同様の遺構も確認されている。区画溝からは、土師器皿・青磁・白磁・東播系播鉢・備前窯播鉢などが出土しているが、煮炊具は石鍋の破片が2点あるのみで土製品はみられない。掲載図面に限定すれば煮炊具2に対して播鉢は13を数える。

宮崎県ではこのように中世の土製煮炊具をみるのが稀であり、管見では宮崎学園都市遺跡で岡山の土師器鍋に類似した土師器の「L」形口縁鍋の出土を知るのみである。

④……………土製煮炊具の個体分析

法量と容量

前章では土製煮炊具の意味と機能を考察する最初の手がかりとして、各地の遺跡から出土する土製の鍋・釜について、以下の方法を基にその定量的な整理をおこなってきた。すなわち、これまでおこなわれてきた定量分析は、出土量が極端に多い器種を伴うため、大部分の比率はそれに覆われてしまい、それ以外の器種の実質的な比較を困難なものとしていた。また本来の食器構成を担っている非土器・陶磁器製品の数量を取り込む場合が少ないため、実態との間に齟齬が予測されるものでもあった。そこでここでは、前者については特に問題とならないためにこれを排除し、後者については非土器・陶磁器製品が存在しても影響を考慮する必要のない播鉢をとりあげ、それと土製煮炊具の定量比の動向に注目したのである。

そこで意図した整理の内容はいくつかあるが、主に日置荘遺跡の検討では、個々の家それぞれの階層・職業の別に代表される様々な事情を背景にもつ中での、土製煮炊具の位置づけについて、京都の場合は、平均化された仮想京都の住人がもっていた土釜と土鍋と播鉢における年代的な変遷との関わりについて、そして各地の状況の検討は、播鉢を基準とした場合の土製煮炊具の量比

および、それらと鉄鍋との関係についての説明であった。

以下それらについて可能な部分での評価を与えるわけであるが、その際それぞれの資料に対してふさわしい方法をとってきたため、これまでおこなってきた①最少個体数、②製品の有無をポイントにした京都方式、③破片数といった3種の数値の整合性について、考察に先行して整備しなければならない2つの条件がみられることになっている。

その第一は定量化の基準数値についてである。これまで多くの研究者が問題にしてきながら克服することのできなかった、破片数と個体数の関係についてである。この問題に関して、最近もっとも生産的な仕事をおこなったのは宇野隆夫氏であるが⁽⁴⁰⁾、大部分の研究者にとってそれを検証する機会を得ることができず、今回もその点での有効な評価を与えることはできなかった。

ただし計測の容易さと対照的に、器種間の数値の比較に困難を伴う破片数ではあるが、その数値の生成は基本的に元の資料の大きさと破片の大きさに依存するものであり、その結果碗と甕の破片数の対比は無意味であるが、素材を異にしても同規模製品相互の比較であるならば、それはけっして無意味な作業ではないはずなのである。今回取り上げた土製煮炊具と播鉢は、大きさにおいてこの問題をクリアしているものと考えられ、その意味で、前章でおこなってきた三様の分析とその数値間の整合性について、ある程度の有効性は期待できるものとする。

そして第二は、中世後期における、播鉢使用の実態に対する疑念である。元来、土製煮炊具の定量分析の対象に播鉢を選んだのは、主に、それが代替をもたないという理由によって、もっぱら日常品として使われた可能性の高いことによる。ところが中世後期においては、各地で瓦器・土師器の播鉢が出現し、陶器を含めた播鉢全体の量も、前代より増加するのである。この現象が、播鉢使用機会の増加を直接反映したものであれば問題は無いが、その多さが、素材の割れやすさの程度に起因しているものであるとすれば、中世後期の播鉢の量は、料理と食文化の実態にとって本質的なものではなく、その定量も、土製煮炊具と正当に対比できるものではなくなってしまう可能性が出てくるのである。

そのためひとつには、瓦器・土師器播鉢の出土量を損耗度の大きさに補正する必要がある場合も、考えられることになる。しかしその一方で、この現象に、それまで陶器製品で充たしていた播鉢使用の需要が、さらにそれより安価な（と推定される）瓦器・土師器製品にも求められるようになった結果である、という評価を与えることができるのであれば、その意味において、総体としての播鉢の使用量はやはり増加したと説明されることになるだろう。

例えば日置荘遺跡のⅢ・Ⅳ期における土釜と播鉢の量比は、播鉢の1に対する3以上であり、一方Ⅴ期における両者の関係は、およそ1:1に近い関係を示している。この状況は、破片数など量比だけのデータでみた場合、播鉢が増えたケースと土釜が減ったケースの両方が考えられ、それ以上の評価は困難なものになってしまう。しかし日置荘遺跡の場合、それぞれのデータは最少個体数を示しているため、Ⅴ期における両者の関係は土釜の数値が増えたと同時に播鉢の数値も大きく増えたものと言えることになっている。しかしその増加した播鉢は耐久性のより低い（と思われる）瓦器および土師器であり、実態としての土製煮炊具との関係がどうであったのか、このケースだけでは、まだ判断できない限界が残る。

そこで次に京都の状況を見ると、中世後期の中でも15世紀代は、陶磁器類全般のポイントが下が

るが、16世紀には明らかに播鉢のポイントが急増する。しかもそれらは備前窯を初めとして信楽窯・丹波窯などいずれも耐久性の高い硬質の製品なのである。さらに、ここで使用している数値の性格は、日置荘遺跡ほどではないが、破片数より、個体数に準じたものとみることができるものである。したがって京都では、16世紀の播鉢は他資料との相対比ではなく、それ自体明らかに数を増やしていると、言えるのである。

小稿は、播鉢に関する議論を軸においている訳ではないため、これ以上の言及は避けるが、これらの検討により、日置荘遺跡をはじめとする、中世後期の播鉢の増加は、製品の質の程度と別の論理において否定できない状況であったものと考えられ、そのため、土製煮炊具との相対比についても、基本的には、そのままあつかっても構わないものと考えるところである。

以上いくつかの仮定と条件付きの前提ではあるが、これらの要件の整備により、これまでおこなってきた土製煮炊具と播鉢についての定量分析は、その基準数値と数値生成の背景の相違に関わらず、一定の有効性をもっているものと評価されよう。

そこであらためてそれぞれの成果を検討すると、中世前期では、播鉢と土製煮炊具が1：3以上の関係にあることが、日置荘遺跡とその他の各地のデータからうかがうことができる。各遺跡の破片数データについては、年代が特定できない点、調査範囲と村または屋敷の関係が説明しにくい点などで条件は付けざるをえないが、大部分のデータが播鉢1に対する土製煮炊具3の比率を示しており、この傾向が全国的なものである可能性を示している（図14）。

京都の場合についても、播鉢を1とした場合、土製煮炊具はそれ以上の数値を示している。さらに同規模製品の破片数は同規模製品の個体数に対応しうると考えられるため、量比については、日置荘遺跡と他地域の遺跡のデータが、製品の有無をサンプリングした京都のデータより信頼性が高いと考えられる。したがってその意味において、京都の量比は、播鉢1に対して土製煮炊具が3以上になる係数を付与することも、可能ではないかと考える。

すなわち、中世前期において播鉢と土製煮炊具の量比は原則的に1：3以上であり、しかもそれは列島の広い範囲で認められそうなのである。日置荘遺跡の検討をふりかえれば、土製煮炊具の定量は、ミクロ的には個々の屋敷地で異なりながら、マクロ的には一定の規則性を示すものであったが、それが特に播鉢に対しては、全国的に一定の量比をもった生活品であったとすることができるのである。そしてそればかりでなく、中世後期の京都の例に代表されるように、両者の変遷は、有機的に連動していた可能性が高いのである。

当初よりこれらの資料をとりあげた定量分析は、基本的に列島を通じて基層となる共通の食文化がみられたことを前提としているものであるが、この点に関して、その基軸となった播鉢が日常品であったとするならば、それと有機的な関係にあった土製煮炊具についても、それと同様な役割を果たしていたと言って良いことになるはずと考えられよう。

以上、播鉢との関係における土製煮炊具の性格について述べてきたが、この分析で意図した考察はそれだけではなかった。土製煮炊具に対して、おそらく中世の煮炊具の基本にあった鉄製品との関係、および土釜と土鍋の関係がそれである。

最初に鉄鍋との関係であるが、土製煮炊具が日常品であったとするならば、鉄鍋はどのような役割を果たしたのであろうか。そのために、やはり汎日本的な資料である播鉢を基準として、土製煮

図14 土製煮炊具と播鉢の比

図15 京都の土製煮炊具の法量差

(烏丸線遺跡 X-5 土坑4)

炊具の有無と無関係に、見えない鉄鍋の存在を浮かび上がらせようとした。しかし、これは現在明確な見通しをつける段階にない。

一方後者については、土釜・土鍋の両者を備えている京都の土製煮炊具の量を、他の地域の土製煮炊具の量と比較して、その差と他地域の非土製煮炊具との関係についての資料を検討する試みをおこなった。しかし示されたデータによれば、播鉢に対する京都の土製煮炊具の数値は必ずしも他地域の2倍とはならず、その結果はどちらかと言えば類似した数値を示すものとなった。これは京都の土釜と土鍋が形態と無関係に同様な用途に使用されていたことを意味するのであろうか。これまでの方法ではいずれもこれ以上の展開をみないようである。

そこでここでは次に、法量と容量に視点をおくことにより、土釜・土鍋・鉄鍋の関係をみることにしたい。

とりあげた資料は京都・布留遺跡(大和)・長原遺跡(河内)⁽⁴¹⁾・平井遺跡(和泉)・草戸千軒町遺跡(備後)・防長⁽⁴²⁾・肥前⁽⁴³⁾の各資料である。計測した法量は、破片も含んでいるため、容量に最も大きな影響を及ぼす胴部最大径ではなく、それに次いで普遍的な容量との関係を想定できる位置として、釜は罎下面、鍋は口縁の屈曲部での内半径である。

最初に京都の例をみると、鍋・釜ともに類似した傾向を示し、半径の中心は10cmにあることがわかる(図15)。また13世紀から15世紀まで容量の変化しない状況もみえる。なお15世紀の鍋で14cm規模のピークがみられるのは、これ以降体部が外傾して器高を減じる焙烙形の初現を示すものであり、実質的な容量には反映されないデータである。

次に布留遺跡の資料をみると、時期を経て径のピークの中心が、「S」字状口縁の釜から外折口縁の釜、内折口縁の釜の順で15cm～13cm～10cmへ減少していることがわかる。特に14～16世紀にみられる、口縁部を内折する釜については、ほぼ京都の釜・鍋と同じ法量・容量をもっていたことになる。長原遺跡のデータは、13世紀を中心とした資料であるが、10cmと15cmにピークをもつ。ただしこれらのほとんどは井戸枠に転用されたものであり、土坑などから出土する釜は、径が14cm以下のものとなる。平井遺跡は13～15世紀と16世紀で法量の規模に差が認められる。すなわ

ち13～15世紀までは14cmを中心としているが、16世紀にはその中心が11cmと減少する。

草戸千軒町遺跡では足釜・鍋・亀山系の鍋および釜がみられる。このうち足釜はいずれも法量が小さく、径は10cm程度を測る。また釜は量は少ないが14cm規模を示す。鍋は10cm以下と13・17cmにピークをもつ。また亀山系の鍋はやはり10cm以下と12・14・19cmにそのピークをもつ。14・19cmは、一般の鍋に対しひとまわり大きなサイズを示すものと考えられるが、亀山系の鍋は、前者の鍋に比べて、体部の傾斜が緩やかで器高が低い分において、京都の15世紀以降の鍋と同じ関係にあるものとする。なお、足釜はいずれも10cm程度の小型であった。

またこの遺跡からは鉄鍋も比較的多く見つかっているが、その規模は10cm程度と16cmの2段階に分けられる。

防長の資料は、足鍋を中心として土鍋がこれに加わる。法量は足鍋がほとんど11cm規模に集中し、数は少ないがそれに先行する足釜も13cm規模の比較的小さな群に含まれる。一方鍋は14cm以上でほぼ2cm規格で法量のばらつきがみられる。

肥前は短い鰐が付くものの、基本的には鍋の範疇でとらえることができ、規模は14・17・20cmの3段階に分けられる。

鉄製品のデータは、鍋が10・12・15cmと21cm以上に分けられるが、釜は大半が儀礼用の製品であり、このデータには含むことができない。

さてこれらのデータを整理すると、おおむね10cm・14cm・20cm前後にその中心のあることがみてとれる。そこで最初に10cm程度の資料を見ると、京都の鍋・釜、大和の中世後期の釜、河内の小型釜、和泉の16世紀の釜、備後の足釜と鍋、防長の足鍋などがみられ、備後の亀山系の製品についても、先に述べたようにその形態が他の製品に比べて体部の外斜を特徴としているため、小型の口径は12cmとしても、同規模のグループに含まれるものと見ても良いだろう。

つまり、10cm前後の法量は、京都を中心とした多くの地域でみられ、特に中世後期または16世紀代においてその傾向は顕著なものと言える。また足付きの製品は大型のものよりも、このサイズの製品が主流となっている可能性がある。

さらに京都に限ってみれば、15世紀までの段階において鍋・釜ともに法量についての差は認めにくく、口縁部と鰐の有無を除いた形態の特徴も共通した点が多い。したがってこれらの器種については、結果としての用途についてはともかく、機能は同様なものであった可能性が高いことになると言えよう。

次に14cm前後の資料をみると、中世前期の大和の釜、同様に中世前期の井戸杵に転用された河内の土師器釜と和泉・大和の釜、および、防長と肥前の鍋がならぶ。これらの資料からその規則性をうかがうにはその数が少ないが、河内・和泉においては、中世後期の瓦器釜にも法量の大きな製品がみられ、その傾向が特に中世前期限定されるものではなく、その器種についても、地域による別はあるものの、この規格がどちらかの時代に固有なものではないことは、指摘できそうである。

一方これら土製品に対して金属製品はどのような状況を示すのであろうか。草戸千軒町遺跡の資料によると、その法量は10cmと16cm程度におかれ、五十川氏の収集資料によると、10cm程度と15cmおよび21cm以上がみらる⁽⁴⁴⁾。基本的に土製品、金属製品共に同様な法量規格にあったのだろうか。これまでの資料においてそれを強く否定するデータは見られないことになる(図16)。

図16 煮炊具の法量グラフ

ところで明治41年の資料によれば⁽⁴⁵⁾、その法量は「小鴨丸鍋」・「三ツ耳鍋・四ツ耳鍋」の場合、8寸から9寸5分、1尺1寸、1.2、1.25、1.35、1.4以降は1寸きざみで1.7まで、「大和鍋」の場合6.5寸、7.5、8.5、8.8、9、9.5、1尺、1.05、1.08、1.12、1.18、1.2、1.3、1.4、1.5、1.55と複数みられる。一方、これを容量（正水量）に換算すると、1尺強が4升であり、「小鴨丸鍋」・「三ツ耳鍋・四ツ耳鍋」などは基本的に1升単位の基準が法量を支配しているといえる。

また、「大和鍋」の場合は全16規格の内、半数の8規格が3.5升以下であり、その容量間隔は1～5合のすべてランクにあたっている。なお、これを法量になおすと、口径で3分（1cm）～1寸（3cm）の差となっており、器高は異なるものの、口径をみれば、わずかの差が実質的な規格の差に反映されてくるのがわかる。

その点で言えば、先にまとめた法量の数値が果たして単一の基準となりうるか、検討の必要な部分も出てくるものではあるが、それらを保留して論をすすめるとすれば、延喜式にある平鍋が2升であり、一般の家庭で料理のために使われる鍋は2～3升のものがもっとも多いとされるため、遺跡で遺されやすい鍋の法量は9寸～1尺（直径30cm程度）のものと考えられることになる。

先に出土土製煮炊具の法量を、半内径で10・14・20cm程度、鉄鍋の半内径を10・15・20cm以上としたが、これらのうちの14または15cm規模の製品は、民俗資料で言う2～3升の一般用とみ

図17 鐔の形態

(1・4 大和, 2 紀伊, 3 伊賀, 5 播磨, 6 近江, 7 讃岐, 8 土佐, 9 阿波, 10 備後, いずれも引用は第1部参照)

て良いことになる。

ただし鍋の形については、明治の斎江家のカタログが11種類を数えるように、その使用法によって長時間煮る深い鍋と短時間火にかける浅い鍋に大別できるなど、上記の仮定に器高の差を考慮しなければならないのは言うまでもない。

なお、半内径が10cm程度の口径は20cm以上となり、「大和鍋」の規格において最小の6寸5分(1升)に対比され、半口径が20cm程度以上の口径は1尺5寸弱と考えられ、その正水量は1斗クラスに対応する。

使用痕跡

土製煮炊具の意味と機能を考えるに際し、この点が最も大きな意味をもってくるとは言うまでもない。実際に内外面に残された擦痕等と食物残滓を明確に分析することができれば、この問題の大半は解決に近づくことになる。

しかしこれまでに検出されている土製煮炊具のほとんどは、大破した後の細片であり、さらに復原後の状況においても肝心の底部に残っていないものが通有である。また食物残滓の分析についても、同様な理由により資料が少ないこととあいまってデータの集積は未だ十分ではない。

そこでここでは限られた状況の中から、鏝・口縁部の穿孔に注目して整理をおこなってみたいと考える。

これまで鏝の有無により鍋と釜に分けてきたが、外面を観察する限りにおいて、煤の付着状況はいずれも胴部上半におよび、そこに明瞭な加熱方法の差は認められない。鏝をもった土製煮炊具の分布は、京都・大和・摂河泉を中心として、東は近江・伊賀・尾張から鎌倉関東の一部、西は丹波・播磨・阿波・安芸と肥後の樺万丈窯の資料の中にもみることができる⁽⁴⁶⁾(図17)。

しかし、これらの中で、物理的に竈に据えることができるのは摂河泉の一部にすぎず、大半は鏝部より胴部最大径が大きいため不可能な状況にある。さらに仮に竈に据えることができた場合でも、3升の場合など、5kg以上の内容物を支えられるほどの強度がそれらにあるのか疑問の点が多い。

そしてこれらの鏝は、摂河泉の資料をのぞき、いずれも時代を経るにしたがって退化する傾向が認められるのである。一般に形骸化は機能の喪失によっておこる現象であり、その意味でこれらの製品は、形態の特徴にかかわらず、その用途に鏝は不要であった、言い換えれば鍋的な使用がなされていたとすることができるものとされよう。

さらに加えれば、瀬戸内を中心とその東西の地域でみられる足付きの土製煮炊具であるが、このうち鏝の付く製品はその構造に矛盾を内在しているとも言えるのである(図18)。すなわち、3カ所に付けられた脚は、言うまでもなく五徳の代わりであり、これらの製品は特定の竈を必要としない持ち運びに自由度の高い製品と言える。ところが釜は基本的に竈に据えられるはずであるため、脚は本来不要なのである。

鏝は当初に釜がもっていた意味を系譜として引くだけのものなのか、あるいは別の用途に使われるためにあったのか、これまでの整理ではあまり積極的な必要性はみられないようである。

次に口縁部にみられる穿孔についてであるが、その例は関東・北陸・畿内、土製煮炊具と盤形の一部にみられるようである(図19)。

鎌倉では千葉地遺跡⁽⁴⁷⁾・諏訪東遺跡⁽⁴⁸⁾などで「鉢型の手焙り」形土器・土釜・伊勢型鍋に穿孔がみられる。手焙りの場合、口縁部下に外方へ傾斜する形で1対、焼成前に穿孔されるものもみ

図18 各地の脚付土製煮炊具

(1：山口(文献註：42)，2：備後，3：岡山，4：播磨，5：近江，6：京都，7：摂津，
8：讃岐，9：阿波，10：土佐(田村遺跡)，11：伊予，12：肥前(文献註：43))
なお，他の引用は資料編による。

図19 穿孔された土製煮炊具と手焙り

(1 長谷小路周辺遺跡, 2・4・7・9・10 千葉地遺跡, 3・5・8 諏訪東遺跡, 6 辰口西部遺跡, 11 太井遺跡, 12 長原遺跡)

れるとされる。また底部に火を受けたものも数点みられる。

調査者はこれらの状況から、それらが基本的に手焙りとして使われ、一部が鍋としても使用されたと推測している。土釜の場合は口縁部下の鏝上に、2孔が1対で焼成前に開けられている。また、千葉地遺跡では、口縁部付近に穿孔された土師器の火鉢が、火にかけられた状態で出土した例も知られている。

なお長谷小路周辺遺跡では、井戸3から菊花文のスタンプを押された瓦器で、穿孔のみられる例がある⁽⁴⁹⁾。

北陸では辰口西部遺跡の包含層から口縁部に穿孔のある鍋が出土している⁽⁵⁰⁾。

畿内では長原遺跡 SE049から、13世紀代の土師器釜で鏝上の頸部に穿孔のある例が知られ、太井遺跡土坑87から、14世紀代の瓦器釜で口縁部に焼成後の穿孔のみられる資料がある⁽⁵¹⁾。

以上、限られた資料ではあるが、鏝と口縁部の穿孔に注目してその使用状況を見てきた。このうち鏝の意味については先に述べたとおりであるが、口縁部の穿孔の機能はそれと整合するのであるうか。

結論を述べる前にその状況を整理すると、地域としては特に偏在するようにはみえず、時代も固定的ではない。ただし資料は14～15世紀に多いと思われる。器種についても固有のものとは思えず、

図20 草戸千軒町遺跡の煮炊関連遺物

釜・鍋にこだわらずそれぞれの地域で通有な製品にみられるようである。また穿孔は鎌倉の場合焼成の前が多いのであろうか。畿内では焼成後が一般的と思われる。なお、墓などから出土する資料には管見ではみられない。

孔周辺の使用痕・擦痕などの検討にはいたっていないが、これらの状況より、もっとも可能性の高いものとして、ここではこの孔を弦の挿入孔に、対比してみたいと考えている(図20)。なおその際、鎌倉の手焙り型土器がどれほど鍋に使われたのかは検討の余地が残るが、これらの孔が弦のためのものであることは、その問題に対してそれほどの障害にはならず、一方で弦付き鍋が中世半ばに現れることは、五十川氏の考察の中で検討されているものでもある。

この状況において畿内の土釜をみれば、頸部に穿孔のみられる資料は一部にすぎないが、そうであるならば、その用途には明らかに日常品として、しかも鍋的な使われ方をした様子がそこから復原できることになる。

この痕跡は、土製煮炊具の存在を介在することによって、そのモデルであった鉄製弦付き鍋の全国的な普及をも示し、同時に西日本では、それでもなお日常品としての土製煮炊具を必要としていた状況を、あらためて確認させるものになるのではないかと、考えられるのである。

①……………おわりに

小論における問題の所在は、中世社会史の基層を構成する食文化において、おそらく実態としてその主軸にあった鉄製品の存在にも関わらず、中世を通じて西日本と東海から南関東の一部で使用され、その後期には東北・北海道をのぞいて全国的な普及をみせる、土製煮炊具の意味と機能につ

いてであった(図21)。

そのために、定量分析をはじめとする様々な方法の考察を、これまでおこなってきたわけであるが、本項ではそのまとめにかえて、文献学・民俗学などからのそれらに対する評価をあわせて、この問題を考えていくことにしたい。

最初に検討したいのは、鉄製煮炊具の具体的な用途と役割についてである。

朝岡康二氏はその著作の中で、鍋と釜についての明確な定義をおこなっている⁽⁵²⁾。すなわち「鍋とは比較的到底の浅い器」であり、「釜とは底の深い器を指す」。そして釜は「鍋の上にもう一段立ち上がった上縁部(「竈の上に露出する」)をつけたものであり」、通常その境目にはは鋳がつけられているものと言え、釜と鍋の違いは、鋳の有無よりも、外方へいったん広がった鍋形に、ふきこぼれや熱効率の向上および容量拡大などの為に、さらに上縁部を延長したところにある、とされるのである。

さらにこの形態の特徴から、鍋と釜は作り方も異なり、前者が鋳型の「抜け勾配の原理」によって量産できる製品であるのに対し、後者は青銅製品からつながる古い技術形態と伝統をもち、鍋よりさらに工程の複雑な高価な製品であったとされるのである。

そしてこのような形態・構造の違いをもつ釜と鍋において、用途もやはり異なっていたようである。

結論的に言えば「食物調理において煮る・煎る・焼く・炒める・その他には鍋を用い」「湯通し・ゆがく・ゆでる」・蒸す「などの場合には釜を使用する」とされ、釜の場合はその基本形として湯沸かしが本来の用途とされている。

釜は湯を沸かすこと、そしてそこから派生した「ゆでる」または「蒸す」ための器であり、鍋はそれと異なった「煮る」ための役割をもっていたそうである。

さてこれらの整理について2・3の点をまとめると、まず土製煮炊具と鉄製品の関係については、おそらく「炒める」・「揚げる」の作業については土鍋では物理的に不可能であろう。一方釜の用途については、それが湯沸かしであるならば鉄製品であろうと土製品であろうとも同様な役割は果たすものと思われる。ただし「蒸す」については、何らかの器具にかけて、中に数kgの水を入れ、さらにその上に荷重をかけることが、土製品に可能かどうか、判断の難しいところである。

煮炊具に求められた調理法の中で、土製品にとって不可能なものがあったことは否定できない。その点において鉄製品と土製品の役割分担の一端を知ることができよう。

また弦付き鍋については、それが日本固有のものであること、内耳鍋が東日本の特徴であることから、それが西日本にひろがっていった可能性を指摘しているが、この現象は先に整理した土製煮炊具の口縁部にみられる穿孔が関東で多くみられる点と対応するものかもしれない。

形態については、先の明確な定義が土製品にも適用されることがわかる。すなわち鋳(状部分)が付いていても、体部が外方へ開くだけの製品は、機能的に鍋に分類されてもいいことになり、釜形として山陽以西で孤立していた備後・豊前・肥前は、これにより実態としては鍋に包括することができることになる。

また一方で、鋳をもたないか、もっていても竈に対する機能が不全であるが、頸部または口縁部が内傾する製品は、既に述べているように⁽⁵³⁾、土佐・阿波・紀伊・大和・伊賀・伊勢・播磨・近

図21 中世後期の土製煮炊具

参考文献は、資料編の各資料および谷口俊治「豊前地域の中世雑器」『研究紀要』3，深水邸埋納遺跡（註46），浅野晴樹 1991『東国における中世在地系土器について』『国立歴史民俗博物館研究報告』31，足立順司 1987「内耳鍋の研究」『研究紀要』Ⅱ，愛知県埋蔵文化財センター 1994『清洲城下町遺跡』Ⅳ

江・三河・遠江の、畿内および太平洋側に共通の地域性として包括される。

そして脚付きの製品はほとんどが鑊付きであり、さらに体部の上半は内傾しているのである。

これらの状況より、ここでは少なくとも鑊をもたないか、もっていても竈に対する機能が不全であるが、頸部または口縁部が内傾する製品および、脚付きの製品については、高価な鉄釜の代わりに、その用途として、すなわち湯沸かしに使われたものと整理することができるのではないかと考えられる。

それではそれ以外の製品についてはどうなるのであろうか。

ところで中世の食事内容の視点でみると、当時の米食は、「蒸し飯」から「炊き飯」への移行期と言われている。また足立 勇氏によれば、鎌倉期の飯は基本的に強飯であり、上流でようやく今日の半白米くらいであったとされている⁽⁵⁴⁾。『吾妻鏡』には、焼米（水に漬けておいた粳を炒り、白について脱穀した米）が、『庭訓往来』などには糲がみえ、一般の庶民においては、米以外に麦・稗・粟を食し、さらにこれらは飯・粥にかかわらず菜の付属品であったとされているのである。

周知のように絵巻を見る限りにおいて、釜は湯沸かしがほとんどであり、調理の場面で登場するのはほとんどが鍋である（表4）。その点で実際の食事、特に米食の調理法についてが問題とされる訳であるが、これらの状況をみれば、当時一般の調理に最も必要な器具は鍋であり、米炊き用の釜は、それが高価であることも背景として、絵画資料にはそれほど登場しなくても良いことになるのである。

そして数少ない米穀類の調理の一部に、湯沸かしとして土製煮炊具が使われたとするならば、荷重などが問題として残されるが、そこに土製煮炊具の、ひとつの用途が与えられても良いことになるだろう。

実際、脚付きの土製煮炊具については、その中でなにかを煮た後に、反転して洗浄する行為は、不可能ではないにしても、あまり現実的な行為とは思えない。

表4 絵巻にみえる煮炊具

それではあらためて外上方へひろがる形の土製煮炊具はどのような使われかたをしたのであろうか。

これに対して積極的な評価をくだす明確な根拠は、やはり内面に付着した残滓の内容分析とその成果であろう。しかしこの点に関しては、先にも述べたように現時点で資料の収集が不十分な段階にある。もっとも必要な底部が最初に破損するため、有効な資料が得られにくいのである。そしてその原因のひとつには、破損した場所と、残りの破片の捨てられた場所が異なっていることも考えられるのではある。文献学の史料は行為の経過を表すことができるが、考古学資料は本来の行為と出土状況の間に別の論理が入り込むことが多いため、現象は必ずしも常に実態を表現しているわけではないのである。

しかるにそうであったとしてもなお、接合不可能な土製煮炊具の細片の中に、なんらかの付着物の認められる資料がもっと出てきても良いはずではないだろうか。

草戸千軒町遺跡の場合でも、付着物のみられる資料もあるが、底部に残っている資料で、著しい使用痕の認められないものも明らかに存在する。

そう考えた場合、やはりこれらの土製煮炊具についても、中に入れられたのは主に水であり、用途は釜と同様なものであった可能性が高いのではないかと、考えるところである。

もっとも、結果としての用途は多岐にわたるのが通常であるため、それを「煮物」に用いていけない訳ではもちろんなく、この議論のために必要な調理法と具体的な使用痕跡の関係の普遍化もこれからの段階にあって、さらに現代にも残る食の地域性も考慮しながら、また使用痕の観察可能な播鉢鍋の用法も含める必要があるなど⁽⁵⁵⁾、この問題は画一的な捉え方では対応できない内容をもっているものと考えられる。

ところでこのように、土製煮炊具が主に高価な釜の代用品として、湯沸かしとそこから派生する用途に用いられたと仮定すると、それでは中世前期の東日本ではその調理がなされなかったのか、という問題があらためてでてくる。

そこで、この問題を考えるために、最初に、文献に現れる家財道具の中の鍋と釜を検討してみた。

小泉和子氏による「新見地頭方政所見搜物色々在中」(寛正4年：1463)によれば⁽⁵⁶⁾、地頭方政所では武具から調度品まで多数の品が記録されているが、この中で考古資料に対応するものとしては、20枚以上の折敷・100個以上の漆器碗・3斗と5斗の甕が合計4・5升鍋が2・わかし鍋が1・釜大小2・五徳3・臼1・桶10以上・茶釜2・陶磁器の碗5以上・陶磁器の壺・香炉などであり、供膳具としての漆器の多さが確認されると同時に、鍋・釜の存在が知られる。

またこれらの資料について、日置荘遺跡との対比を試みれば、播鉢は不明であるが、鍋・釜と甕の比率は5：4で貯蔵具の多さに違いの見られることが指摘できる。

このうち5升鍋は、明治の基準でいくと1尺2寸程度の大きさとなり、半径は18センチクラスに対応する。またわかし鍋として、釜的な用途を思わせる鍋がみられる点は興味深い。

また萩原三雄氏による甲州八田家家財目録をみれば(慶長11年：1606)⁽⁵⁷⁾、「なへかね たおし物 三百めほと」「なへ大小 三ツ」「かま大小 五くち」「かま たおし物 大小五つ」「なべ たおし物 大小五つ」「なへ 大小 四つ」などであり、これ以外に茶釜が二つみられる。合計は鍋

13・釜7になろうか。やはり日置荘遺跡との関係においては、播鉢が「すり鉢1」以外、「くろきはち5」「さはち3」「古すすの鉢1」「あかねのはち1」「つちはち1」とどのような関係にあるのかわからないが、貯蔵具は「ちゃつほ1」「あふらつほ2」「かめ2」「すつほ1」であり、煮炊具20に対し貯蔵具6と、3倍以上の差をもっていることになる。

さらに網野氏の整理によれば⁽⁵⁸⁾、若狭太良荘の小百姓(貞和3年：1347)の例では、鍋3大小・金輪2、仁和寺の牛飼力王丸の例では(弘長元年：1261)、釜1・石鍋1・鉄鍋1・七斗納釜1・砥鉢1・金輪1・垂壺1・磨臼1などであり、これ以外にも鉢はみられるが、砥鉢が播鉢であれば、これらの関係は、煮炊具：播鉢：貯蔵具=3：1：1となり、日置荘遺跡のデータに近いものとなる。

また紀伊国荒川荘に関連した山僧法心の例では(正応4年：1291)、鍋大小27・釜大小13・鉄輪23・壺大小27とされ、煮炊具と貯蔵具の比はおよそ3：2となっている。やはり日置荘遺跡のデータに近い。

室町期の資料では、山城国上野荘の百姓の例で(応永32年：1425)、釜3・鍋大小3、若狭国の名主では(宝徳2年：1450)、鍋3大小で釜の記載はない。また16世紀半ばとされる若狭国御賀尾浦の刀禰の例では、「つるなへ一つ」「とはんのなへ一つ」もみえる。

限られた史料ではあるが、鉄製煮炊具は汎日本的に一般的な調理用具であり、その量は貯蔵具に対して数倍の比であった可能性が高い。また鍋と釜の関係については、同数または鍋が多い傾向を指摘することができるものと考えられ、その際、鍋が釜の約2倍の数値を示す山僧法心・甲州八田家の事例を本来の姿とみることができるのであれば、それ以外の事例では、同様な食文化を形成するために、鉄製品以外の煮炊具を求めなければならないことにもなるのである。

そして問題は中世前期における東西日本での土製煮炊具にみられる地域性の意味についてである。

最後に、この問題に対する展望を述べてまとめにかえたい。

基本的に、土製煮炊具は日常品として生産されたものであろう。河内の各所では、井戸枠に転用された土釜が見られるが(図22)、それは、破損した土釜を井戸の掘削に備えて貯めておいたと考えるよりも、恒常的な供給体制の基で何時でも容易に入手することができたからであると、考える方が自然であろう。そしてそうであれば、その需要は特殊な儀式だけを対象としたものではなく、不特定多数の人々が日常品としてもとめたところにおかれるのが妥当ではないかと考えられるのである。

しかし、もちろんそれ以外に、『延喜式』などから復原される、特殊なありかたも存在はしていた。そこで使

図22 長原遺跡の土釜井戸

われている釜は1石サイズの大型品であり、塙は月あたり30口もの数が供給されているような土製品であった。この塙は伊勢神宮の新嘗祭においても使われるものであり、宮廷社会においては、かつて用いられていたそれらが、儀式に際して特に選ばれた特殊品になったとされるのである。

その意味で、墓や地鎮などに利用される土製煮炊具も、同様な形でとらえられよう。なお、このテーマはそれ自体、東アジア的な視点で考えることのできる興味深い課題であり、稿をあらためて考えてみたいところではある⁽⁵⁹⁾。

したがって、これらが日常品として生産されたものであるならば、やはりその主な用途は、形態の特徴と使用痕の不明瞭さ・文献に見る鍋と釜の量の関係などからも、鉄製品が実際の汁もの料理に使われる一方で、鉄釜の代用品として、湯沸かしとそこから派生する「茹でる」「蒸す」行為であった可能性が高いものと考えられるのである。

その意味で言えば、京都の土製煮炊具は鐔の有無による形態はことなるが、14世紀までの段階で両者の器形は類似しており、法量も同様なため、用途も同様であった可能性の高さも、指摘できることになる。その違いは、鐔の存在に古来からの湯沸かしの伝統を重視したブランド的なものなのであろうか。畿内を中心とした地域で鐔付きの土製煮炊具が分布する点についても、同様な意識の

図23 五徳と土製竈

(1 九州歴史資料館 1975『大宰府史跡 昭和49年度発掘調査概報』第33次調査, 2 三光村教育委員会 1989『三光村の遺跡』より深水邸埋納遺跡, 3 滋賀県教育委員会 1990『横江遺跡発掘調査報告書』Ⅱ, 4 兵庫県教育委員会 1992『初田館跡』南掘, 5 草戸千軒町遺跡)

あらわれ故の現象として考えたいところである。

また本論で触れることはできなかったが、火処についてみれば、構造的にこれらが竈に据えられた可能性は低く、一般的にはいずれも五徳の上で使われたものであろう(図23)。なおこの問題は関東での事例研究が進んでおり、既に坂井 隆・馬淵和雄氏等によって考察がおこなわれている⁽⁶⁰⁾。

そして問題の東西日本の差であるが、これまでの整理を振り返る限りにおいて、やはりその違いは、両地域で異なった食文化の違いに求めざるをえなくなってくることになる。ひとつの可能性として、中世前期においては、西日本は湯沸かしを利用した調理法が普及し、東日本ではそれが無かったのではないだろうか。

そしてその調理法が14世紀後半から15世紀にかけての時期になって東日本へも普及し、西日本でもより多く普及する。さらにここで重要な点は、それが土製煮炊具の変化だけにとどまらず、播鉢も巻き込んだ変化であった可能性の高い点である。この時期、それまでの食文化と異なった新しい食習慣が出現し、急速に全国に普及したと考えられるのである。

それではその具体的な内容が何であったのか、おそらく中国系の料理だと思われるが、ここでその詳細を検討するには未だ準備が整っていない。

ただしこの視点において、これまで様々な面から議論されていた、中世後期における在出土器生産の活況について言えば、それは播鉢などの個別の製品の動向だけで語られるものではなく、食文化の変革によって求められた大量の鍋と播鉢の需要にこたえた結果でもあったと、言えるのではないだろうか。

しかるに16世紀に入り、鉄製煮炊具の普及はもはや全国的なレベルで進み、その結果土製煮炊具はそれまでの役割のほとんどを鉄製品に奪われる中で、焙烙など特定の器種に限定されていく。

鉄製煮炊具の工人達は、それまで同業村落または村落内工人として供給先の限られたありかたをしていたが、中世後期における全国的な都市化の流れの中で、それぞれの都市の支配構造下に自らの位置をおくかわりに、その需要層の拡大に成功していったものと思われる。

そしてここに中世の食文化を支えた土製煮炊具はその役割を終え、姿を消していくのである。

小稿は土製煮炊具をてがかりに中世食文化の復原を考えたものであるが、この問題は単に食生活だけにとどまるものではなく、中世の前期から後期にかけての窯業生産および、鉄鋳物師の動向と中世都市・町・村の変革までまきこんだ社会史全体の議論に展開する様相も見せてきている。

積み残した多くの課題とあわせて稿をあらためることにしたい。

諸先学からのご教示・ご叱正をいただければ幸いである。

小稿作成にあたり、吉岡康暢氏を研究代表とする共同研究員各位、小野正敏・高橋照彦・朝岡康二・八重樫純樹・下川達彌・宇野隆夫・田嶋明人・馬淵和雄・服部敬史・越田賢一郎・脇田晴子・河野通明・須藤 護をはじめとし、多くの方々からご教示をいただいた。十分な成果をあげられなかったお詫びとあわせここに記して感謝の意を表します(敬称略)。

浅野晴樹・網田龍生・飯村 均・五十川伸矢・岡本武憲・尾野善裕・河野眞知郎・斎木秀雄・塩地潤一・鈴木康之・鈴木晋一・高橋 徹・徳永貞紹・中野益男・長津宗重・中村和美・並木誠士・野

場喜子・原田信男・松藤和人・松村英之・美濃口雅朗・宮崎貴夫・森 浩一・山田邦和・山本信夫
・山村信榮・(財)大阪府文化財調査研究センター (敬称略・五十音順)

また小稿の内の「I-(1)日置荘遺跡その2 調査区の景観復原」は、日置荘遺跡正報告の作成に際し計測された(その2) 調査区的全遺物重量データを基にし、そのデータは文献註(5)に依っている。実際の計測には、整理担当であり、全資料の重量計測に深い理解を示してくれた市本芳三氏の指示のもと、多くのアルバイト諸氏があたった。したがって小稿は市本氏とそのチームの協力無しにはなしえなかったものである。文末ではあるが、深く謝意を表するものである。あわせて新海正博氏には煩雑な集計作業で多くの協力をいただき、亀井 聡氏には最小個体数計算に関わる部分で多くの助力をいただいた(文献註(5))。深く謝意を表するものである。

(大阪府文化財調査研究センター、国立歴史民俗博物館共同研究員)

註

- (1)——大橋康二 1980「中世播鉢考(1)・(2)・(3)」『考古学ジャーナル』175・177・179
- (2)——荻野繁晴 1990「財産目録に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集ほか
- (3)——鋤柄俊夫 1995「用途にみる土器文化の地域性」『帝京大学山梨文化財研究所報』第25号。1995「各地の瓦質土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- (4)——大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1988『日置荘遺跡(その1)』・『日置荘遺跡(その2)』・『日置荘遺跡(その3)』・『日置荘遺跡(その4)』・1989『日置荘遺跡(その5)』・1990『日置荘遺跡(その2-2・その6)』・1991『日置荘遺跡(その2-3・6-2)』。鋤柄俊夫 1993「中世丹南における職能民の集落遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集ほか。
- (5)——鋤柄俊夫・亀井 聡 1995「日置荘遺跡その2 調査区の景観復原」『大阪文化財研究』第7号(財)大阪文化財センター。鋤柄俊夫 1995「日置荘遺跡の空間構造」『大阪文化財研究』第8号(財)大阪文化財センター。鋤柄俊夫 1995「畿内における土器・陶磁器の定量分析」『貿易陶磁研究』
- (6)——坪井良平 1984『歴史考古学の研究』ビジネス教育出版社・1989『梵鐘と考古学』ビジネス教育出版社・1991『梵鐘の研究』ビジネス教育出版社・1970『日本の梵鐘』角川書店。網野善彦 1972「真継文書にみえる平安末～南北朝の文書について」『名古屋大学文学部研究論集、史学』・1973「真継文書にみえる室町期の文書」『名古屋大学文学部研究論集、史学』・1974「真継文書にみえる戦国朝の文書(一)」『名古屋大学文学部研究論集、史学』・1975「中世中期における鋳物師の存在形態」『名古屋大学文学部研究論集、史学』・1976「中世都市論」『講座 日本歴史』7 岩波書店・1982「中世初期における鋳物師の存在形態」『名古屋大学日本史論集(上)』吉川弘文館・1983「中世の鉄器生産と流通」『講座・日本技術の社会史』第5巻 株式会社日本評論社・1986「河内日置荘と中世鋳物師」『河内鋳物師の歴史と技術』美原町・1986「中世の旅人たち」『週刊朝日百科 日本の歴史』
- (7)——京都大学埋蔵文化財センター 1981『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅱ
- (8)——京都市埋蔵文化財研究所 1982『平安京左京八条三坊』
- (9)——京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981『京都市高速鉄道烏丸線内 遺跡調査年報』Ⅲ
- (10)——京都市埋蔵文化財研究所 1989『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- (11)——鋤柄俊夫 1988「畿内における古代末から中世の土器-模倣系土器生産の展開」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会
- (12)——京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981『京都市高速鉄道烏丸線内 遺跡調査年報』Ⅲ
- (13)——高橋康夫 1983『京都中世都市史研究』
- (14)——埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994『金井遺跡B区』
- (15)——石川県立埋蔵文化財センター 1988『辰口西部遺跡群』Ⅰ
- (16)——石川県立埋蔵文化財センター 1984『普正寺遺跡』
- (17)——(財)愛知県埋蔵文化財センター 1994『室遺跡』
- (18)——三重県教育委員会 1982『昭和56年度県営園場

整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報]

- (19)——名張市教育委員会 1982『原出遺跡』
 (20)——三重県埋蔵文化財センター 1993『多気遺跡群発掘調査報告』
 (21)——奈良県立橿原考古学研究所 1992『北野腰越遺跡』
 (22)——埋蔵文化財天理教調査団 1985『布留遺跡 布留(西小路)地区出土の中世土器』
 (23)——(財)大阪文化財センター 1984『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』I。佐久間貴士 1984「大阪菱木下遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』No. 4
 (24)——(財)東大阪市文化財協会 1983『若江遺跡発掘調査報告書』I
 (25)——(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988『平井遺跡』
 (26)——(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988『山直中遺跡』
 (27)——(財)大阪府埋蔵文化財協会 1989『二俣池北遺跡・上フジ遺跡』
 (28)——橋本市教育委員会 1984『東家遺跡発掘調査概報』
 (29)——兵庫県教育委員会 1992『川除・藤ノ木遺跡』
 (30)——河原町教育委員会 1983『前田遺跡発掘調査報告書』
 (31)——岡山県文化財保護協会 1995『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』11
 (32)——広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1993~1995『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』I~III
 (33)——広島県教育委員会 1982『道照遺跡』
 (34)——香川県教育委員会 1987『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
 (35)——香川県教育委員会 1992『東山崎・水田遺跡』
 (36)——徳島県教育委員会 1989『中島田遺跡 南島田遺跡』
 (37)——福岡市教育委員会 1987『柏原遺跡群』III
 (38)——佐賀県教育委員会 1991『本村遺跡』
 (39)——都城市教育委員会 1989『松原地区第I・II・III遺跡』
 (40)——宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集
 (41)——(財)大阪文化財センター 1978『長原』
 (42)——岩崎仁志 1988「防長の足鍋について」『山口考古』第17号
 (43)——徳永貞紹 1990「肥前における中世後期の在出土器」『中近世土器の基礎研究』VI
 (44)——五十川伸矢 1992「古代・中世の鑄鉄鑄物」

- 『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集
 (45)——倉吉市教育委員会 1986『倉吉の鑄物師』
 (46)——美濃口雅朗 1994「肥後における古代・中世の土器」『九州土器研究会』第4回資料
 (47)——千葉地遺跡発掘調査団 1982『千葉地遺跡』
 (48)——諏訪東遺跡調査会 1985『諏訪東遺跡』
 (49)——長谷小路周辺遺跡発掘調査団 1995『長谷小路周辺遺跡 由比ガ浜三丁目258番1地点』
 (50)——石川県埋蔵文化財センター 1988『辰口西部遺跡群』I
 (51)——(財)大阪文化財センター 1987『太井遺跡(その1)』
 (52)——朝岡康二 1993『鍋・釜(ものと人間の文化史72)』法政大学出版局
 (53)——前掲書註(3)
 (54)——桜井 秀・足立 勇 1995『日本食物史』(上)雄山閣
 (55)——間壁菫子 1973「倉敷市酒津-水江遺跡」『倉敷考古館研究集報』8, 大橋康二 1980「中世播鉢考(2)」『考古学ジャーナル』No. 177, 四柳嘉章 1981『西川島』II 穴水町教育委員会, 石川県埋蔵文化財センター 1984『普正寺遺跡』, 荻野繁晴 1990「財産目録に顔をださない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集
 (56)——小泉和子 1986「荘園政所の家財と生活」『日本の歴史』2(週刊 朝日百科)
 (57)——萩原三雄 1994「財産目録からみた陶磁器の所有」『日本貿易陶磁研究会 第15回集會』資料・1995「財産目録からみた陶磁器の所有」『貿易陶磁研究』No. 15
 (58)——網野善彦 1986『中世再考』日本エディタースクール出版部ほか
 (59)——森 浩一 1995「津軽の土地柄」(シリーズ都市の考古学 中世城館・浪岡を掘る)『週刊 アサヒグラフ』通巻3810号
 (60)——坂井 隆 1988「中近世の食生活」『群馬の考古学』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団。馬淵和雄 1987「中世都市鎌倉の煮炊形態」『青山考古』5(補註1)——本宿・郷土遺跡は、群馬県の南西部に位置する富岡市に所在する。古墳時代~平安時代と、中世後期~近世初頭を中心とする集落遺跡である。このうち中世後期の遺構は、石垣が施されていた可能性のある堀・井戸などから構成され、いずれも遺跡の東南方に位置する光明院および、その周辺にあった城館に関わるもので

はないかと考えられている。

出土遺物は、内耳鍋、播鉢、土師器杯、瀬戸窯天目碗・折縁深皿・鉄釉印花文壺、中国製青磁碗、常滑窯系甕、石鉢、火打ち鎌、鍋鋳型など多岐におよび、特に、鍋鋳型をもちながら在地産の内耳鍋と播鉢が大量に見られる

点、遺跡の一部に寺院が関係している点、遺物の構成が多様な点など、日置荘遺跡と類似した特徴が多い。

定量的分析にはいたらなかったが、東日本のまとまった集落遺跡で、鉄鍋と土製煮炊具の関係を考える際に、注目される遺跡である。

Aspects of Food-Eating Culture in Medieval Japan from the Standpoint of Earthenware Cooking Vessels

SUKIGARA, Toshio

This paper approaches to the role of earthenware cooking vessels in the food-eating culture of medieval Japan before the use of iron cooking vessels was very much in vogue. Generally speaking, methods of cooking were characterized by the use of pots at hearths in eastern Japan and of kettles placed on furnaces in western Japan. In the early medieval time, however, earthenwares cooking vessels were not used in eastern Japan; iron counterparts were probably widely adopted. The use of earthenware kettles in western Japan was not universal, either. For these reasons, it is necessary to investigate the context of the adoption of earthenware cooking vessels.

Even in Kawachi (present-day central Osaka) which was one of the centers of iron pot production, it has become apparent that earthenware cooking vessels was an essential part of the food-eating culture because of the following observations. The presumed number of such earthenware cooking vessels per residence was more or less proportional to the size and nature of the residence; earthenware cooking vessels were used at any residences. In most parts of Japan, including Kawachi, the presence of earthenware cooking vessels was closely correlated with earthenware mortars that were an important part of daily life in medieval Japan; earthenware cooking vessels were as important as the mortars.

As to the relationship between iron cooking vessels, especially pots, and earthenware cooking vessels, my quantitative investigation shows that the internal dimensions of the iron pots and of earthenware pots and kettles were more or less the same. For this reason, I suspect that earthenware cooking vessels could substitute the iron kettles because iron kettles were more expensive than iron pots. Their presumed function of the earthenware cooking vessels was for heating up water, and boiling and steaming foods, based on the observation that charred organic materials rarely remain inside the earthenware cooking vessels, and the presence or absence of their brim was not a matter of function. These observations suggest that the aforementioned difference between eastern and western Japan in the early medieval stage may be a result of the difference in cooking methods.

In the late medieval stage, earthenware cooking vessels came to be commonly adopted. In

addition to this, all the aspects of food vessels, such as the quantities of production and in the assemblages of different types and functions of vessels, changed in this stage. These indicate that the late medieval stage was an important epoch in the history of food eating culture in Japan. Although the scope of my study is limited to earthenware cooking vessels, it is still a good contribution to understanding the kinds of changes that took place in the food eating culture.